
幼馴染の女ノコ -同級生と殺意の村-

北見哲平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染の女ノコ ー同級生と殺意の村ー

【Nコード】

N8535H

【作者名】

北見哲平

【あらすじ】

まるでご主人様のような絶対的幼馴染。彼女の持ち掛けに拒否権を持たない主人公は「心霊研究会の卒業合宿」という、いかにも怪しげなイベントに参加することになる。しかし、それは恐怖の殺人ゲームへの招待状だった。

序章 一 御馴染の瞬間、一回

ドグシャツ

何の思いやりも優しさも、些細な気遣いすら感じられない音が響き渡る。

「ドグシャツ」か・・・ああ「ドグシャツ」はいい音だ。「ド」は明らかに何かが高速で接触したことを表しているし、「グシャツ」は世間一般では何かが潰れる音。つまり、何かが高速でヒットして、更に何かが高速でヒットしたことにより何かが潰れた音ってことだ。その表現のストレートさが実に爽快だ。

具体的に？・・・うーんそうだな、例を上げるとすれば僕の顔面に100マイル程のスピードで拳がヒットして、何かが潰れちゃったってとこかな。何せ人体急所がたくさんある頭部への強打だからね、そりや色々潰れもするよ。

はあ、相変わらず手加減も容赦も無いな・・・彼女は。

時間がゆっくり流れているような、もしくは完全に止まっているかの様な錯覚を覚える。目の前に広がるモノトーン調の世界なんて、アニメとかでよくあるまさにその物だった。しかし、勿論僕はスタンド使いでも、どこかのお屋敷のメイド長さんみたいに時を操る能力を持っているわけでもない。平凡といえば平凡で、非凡と言えれば非凡と言えなくもない、どこにでも居そうで、もしかしたらここにしか居ないようなただの男子高校生なのだ。

「時止め」なんて神がかり的な能力を所有しているはずが無い。

その証拠に・・・

ドサッ

背中から地面にぶっ倒れる僕。もう痛覚は麻痺しているようだ、後頭部を激しく床に打ち付けたが全くの無痛だった。

ただモノトーンの世界に亀裂が生じただけ。

飛んだ飛んだ今日も飛んだ。まるで、鳥になったみたいだ。

この大空に翼を広げ、飛んでゆきたいよ♪
かの名曲を心の中で独唱しながら思う。今日も飛べるな・・・意識。

「おいこら、ご主人様を差し置いてまた寝る気か」

これから僕が落ちるのは「睡眠状態」ではなく「気絶状態」だつての。一応つつこみ・・・楽しくて仕方が無い。

ぶれにぶれまくって、もうほとんど正常さを失った視界に映り込んだ一人の女の子。状況が状況だけにその表情は全く認識することとできない。無論、彼女が僕に翼を与えてくれた張本人なわけだが、声の調子を聞いている限りでは悪びれた様子は全く無い。

・・・嬉しいくらいにいつも通り。

「ここは雪山だぞ、死にてえのか」

・・・笑ってしまうほどにいつも通り。

「寝るな、寝たらトドメ刺すぞ」

・・・ワクワクするほどにいつも通り。でも、それはちよつと勘弁してほしいな。このまま死んじゃったらもう君に会えなくなるじゃないか。

それだけは、死んでもごめんだね。

怒りっぽくて、暴力的で、鬼畜で、自分勝手に、わがままで、欲しくて、猫被りで、ご主人様だけど・・・だけど僕は。

「どうしてこんな奴のことが好きなのかな」

誰にも、自分にすら聞こえないような音で呟く。彼女は相変わらず、今を時めく女子高生、四月からは華の女子大生とは思えないような汚くて、労わりの気持ちなど微塵も感じさせない言葉を容赦なく僕に吐きつけてくる。

ああ、だんだん気持ち良くなってきた、まるでお経のようだ。

坊さんに成仏させられる悪霊にでもなった気分だ。例えこの世に未練たらた中でも、最期にこんなにも心地よい気持ちになれるのなら成仏も悪くない。

坊さん、あんたは本当にいい仕事をするよ。

でも分かっているんだ。こんなことは日常茶飯事だから。こんなことはもう慣れっこだから。こんなことは日常生活のページだから。小説の百ページに一回登場する四字熟語ぐらい在り来りなものだから。こんなことで僕は死なないし、死ねない。何度目だっただろう、この感覚。残念ながら十回目以降はもう数えていない。数えるのが馬鹿らしくなるくらい頻発で、数えることを忘れてしまうほど通常。

・・・そろそろ完全に落ちてしまいそうだ。現世と暫しの別れてところか・・・別にそんなにカッコいいものじゃないけど。

楽しい夢を望んでいるわけでもない。

せめてそこに待っているのが悪夢でなければ僕は構わない。

虚無でいい、虚空でいい、空虚でいい。

別に何も無くていい。

ただ、君がその憎たらしいくらい悪い笑顔を失わずにいられるのなら。

僕はきつとそれだけで・・・

そこで僕の意識は飛んだ。

1章 一 安らぎの空間、二つ 一 その1

「はあゝ。また面倒なことになったな。はあゝ」
カチカチッ

深いため息にぼやきを交えながら、「Internet Explorer」のアイコンをマウス操作でダブルクリックする。すると三秒もしないうちにごく見慣れた「ヤフージャパン」のトップページが立ち上がった。

元死刑囚「お母さんに」

高校入試トイレ後に白紙渡す

日本の名字、多彩さはなぜ？

奈良の殺人事件、犯人逮捕

トップページのトップックスは様々な記事で賑わっていた。これらを含む世界中の情報がただで手に入るのだからインターネットは止められない。

六畳1Kのアパート。それが僕、睦月悠^{むつきはるか}の住居である。築十五年、決して綺麗とも広いとも言えない住まいではあるが、個人的にはかなり気に入っている。オール電化だし、生意気にも光ファイバーが通っておりネットは使い放題。更に更に、まあ余計なことに余計なことに住人は個性派揃いっていか変人揃いなので、暮らしていて飽きることが無い。

機会があつたら紹介することしよう。

あと、誤解が無いように言っておくけど僕はれっきとした男子である。「はるか」なんて、いかにも美少女ゲームに登場する可愛い女の子の名前（偏見）だが、間違はなく十八歳の男子高校生である。この名前と、周囲の人曰く女の子っぽい外見のお陰で、「悠ちゃん」とか「ハルちゃん」とか「ちゃん」付けで呼ばれ、何かあるごとに女子扱いされる。他の男子達から、突然胸を揉まれたり（勿論無いけど）、股間を触られたり（勿論有るけど）もう迷惑千万、不

愉快極まりない扱いを受けている。

ただ、それも友達故の戯れというか、悪戯なのだから随分と微笑ましい話ではあるが。

まあ、流石に男子に告白されて「えっ！お前男だったのかよ」って言われたときはショックだった。いや、相手の方がショックは大きかったと思うけど。男子でありながら男子の純な恋心を傷つけてしまうなんて、僕はなんて罪な男なんだろう・・・って何言ってるんだろうな。

因みに一応言っておくけど、その告ってきた男子は本当に勘違いしてただけで、当然「ノーマル」だから。え、何でそんなこと言うのかって。それは・・・まあ世の中にはそっち方面の方もいらっしゃるから。

どこにいるかは・・・出来れば聞かないでほしいな。

カタカタカタカタ

そんなことを考えている内に、検索バーに文字を打ち込む。高校に入ってから覚えた、まあタッチタイピングというやつだ。迫りくるゾンビの群れと戦いながら鍛えたのだからそれなりに早いと思う。正直ホラーとか怖いのはあまり好きじゃないので、もっと普通のタイピングソフトで練習しなかったのだが、他でもないご主人様の命令だったのだから仕方ない。

「怖い方が必死に練習できるから、上達が早いだろう。それにタイピングしただけなのにゾンビがガンガンくたばっていくのがいい」とか何とか、結構無茶苦茶な理由だったような気がする。

でもまあ、慣れたらあのゾンビ達は結構ファンキーで可愛かったけど。・・・踊ったりもするし。

「まとがたけむら」

短い文字列。実際にはタッチタイピングを自慢するほどでもなかった。

カタッ

スペースキーで変換する。

「的が武村」

うん、まあそうなるだろう。どう考えても希望通りに変換してくれる文字列ではなかったわけだから、こうなることはあらかじめ予測済みだ。しかし、武村さんって誰だろう。僕の知り合いにはいたようないなかったような・・・どちらにしても無意味な思考だった。仕方が無いので、漢字を一文字ずつ変換する。

「魔咎岳村」

まどがたけむら・・・嫌な名前だ。具体的に何がどう嫌なのかと聞かれると少し考えてしまうが、最低でも魔王や悪魔を表す「魔」と、罪や過ちを表す「咎」という字が連続で目に入って来るのだから、どこかのゾンビのように踊りたい気分にはならないだろう。

本当にこんな奇妙な名前の村が実在するのだろうか・・・いや実在していたのだろうか。

常識的に考えればまず無いだろうし、出来れば無かった方が嬉しいのだが、多分そうはいかないのだろう。

宇宙はこの上なく無限に広大だ。太陽系も果てし無く広い。地球だって雄大に広がっているし、日本だってまだまだ捨てたものじゃない。伊能忠敬や徳川光圀だって、当時の日本のことを全て知っていたわけではないだろう。まして今の日本は、混乱と混沌が渦巻く情報社会。何が本当で何が嘘かなど、僕には判別がつかない。その上妖怪の様に、餓鬼の様に、夜魔の様に、死霊の様に、何かを求め、何かを探し、何かを奪い、何かを怨み、何かを妬み、何かをまた奪い、広き世界を所狭しと縦横無尽に犯し尽くす人間達。自動車、飛行機、電車、テレビ、エアコン、洗濯機、ゲーム、携帯電話、パソコン、ブルーレイレコーダ、萌えキャラ・・・全て怪物。人間が己の欲望を満たすために創作してきた怪物。日本はそんな妖怪達が、怪物達が当たり前のように共存し、悠々と跋扈している国なのだ。今さら疑義事項の一つや二つ増えたところで、憂鬱になることはあっても驚きはしない。

そんなわけなので、名前を書かれたら死んでしまうノートを偶然

拾ってしまうことは多分無いにせよ、奇妙な名前の人や村程度なら、腐るほど存在しているだろう。

カチッ

ヒット件数は僅か数百件。随分マイナーな話のようだ、思っていたよりずっと少ない。「魔咎岳村」について少しでも多くの情報を集めたかった僕にとって、やや落胆せずにはいられない結果となっていました。でもいくつか気になるホームページはある。

「リアル八つ墓村」

「村人皆殺し」

「呪われた廃村」

「悪霊の住処」

先程も言ったように僕はホラーがあまり好きではない、というか怖いのは苦手である。本来ならこんなオドロオドロしいホームページにはポイントの先すら近づけないのだが今回ばかりは特別だ。

なぜなら明日、心霊研究会の連中、それに僕と僕の愛しいご主人様こと姫心知萌きりこもえを加えたメンバーで赴く場所、それがこの「魔咎岳村」なのだ。

「はあ。やっぱり話で聞いていた通りの場所みたいだな。はあ」

溜息、ぼやき、溜息、溜息、ぼやき、溜息、溜息、ぼやき・・・繰り返す。

一晩にして村人全員が惨殺されたって言うのはほとんど伝承や伝説的な話。呪われているとか、悪霊が住んでいるというのはただの噂話。

僕は信じてない。

村人全員が殺されたとなると、どんなに小さく見積もったところで百人位の犠牲者は出るだろう。つまり、あの有名な「八つ墓村」「三十二人殺し」のモデルとなった津山事件の規模を軽く凌駕することになるのだ。大体こんなにも大きな事件なのに、検索で数百件しかヒットしないなんて絶対に有り得ない。

はつきり言って本気でこんな話を信じている人間がいるとはとても思えない。もし本気で信じている人間がいるとすれば、そいつは何かに取りつかれているか、地球を調査しに遠路はるばるやってきた宇宙人かもしれない。

今すぐ捕獲してNASAに売り飛ばしてやろう……。

「宇宙人だよ、本当に」

でも、いくら信じていないとは言っても、こんないわく付きの場所には近寄らない方が絶対良いに決まっている。漫画やアニメ、小説などでは圧倒的に何かよからぬ事故や事件が起きる確率が高いし、何より人が寄り付かなくなった廃墟は怖い、とにかく怖い。そんな場所で夜を明かすのだからもう「何で？人間って温かい布団で眠るんだろ！僕は帰ろう、皆で帰ろう！」と必死で猛抗議したくなる。もしかしたら、その雰囲気は駆られ、本当に幽霊が現れるかもしれない。

そんなことになったら、泣いちゃうよ僕。

情けない話だけど本気だよ。

本気と書いて「マジ」だよ。

僕の周りには結構冗談通じない人がいっぱい登場するよ。

冗談か・・・この話も冗談だったらよかったのに。

でも、例え冗談でも冗句でも僕は知萌の言葉には逆らえない。

彼女の言葉は絶対だ。

分かっている。

だからもう腹を決めた。

いざ行こう「魔咎岳村」。

どんとこい超常現象。

カチッ

「死体の首が並べられた小道」

カチッ

「今もなお成仏できない犠牲者の霊が・・・」

カチカチッ

「激写！心霊写真！！」

うわっ、ごめんなさい。僕、調子に乗りすぎていました。やっぱりオヤシロ様は居るんだと思います。だから、どうかお手柔らかに。

・・・。

何とも弱々しい決意を胸に再びマウスを転がす僕、睦月悠（男）だった。

1章 一 安らぎの空間、二つ 一 その2

「悠、ちょっと話があるからこっちこっち」

昼食を終えての昼休み時間。クラスの男子達とつまらなくも面白可笑しい話に花を咲かせていると、急に知萌が教室の外から僕を手招きした。

眩しい笑顔。

いかにも女の子っぽい仕草。

声優の様に澄み切っていて、よく通る可愛い声。

姫心知萌。僕の幼馴染兼ご主人様。

「おいしい悠、おまえの彼女が呼んでいるぜ」

「あゝ、いいな萌ちゃん、明るくて純情で可愛くて」

「また二人っきりで密談か？あ、それとも猥談？やるね」

「あの姫心さんと、あんなことやこんなことを、羨ましいぞいつクラス男子達が勝手なことを言いまくる。羨ましいと思うなら一日僕を体験してみるか。きっと脳味噌がとろけてグシャグシャになるくらい後悔するぞ。」

しかも物理的に・・・まあそこまで僕は責任持てないけど。

因みに、言うまでもなく知萌は僕の彼女などではない。あれは「呼んでいる」というよりも「呼び付ける」という表現の方が正しい。

因みに、「純情」なんて言葉は、知萌にとって一番当てはまらない言葉である。的確に彼女を指す言葉は「邪心の権化」とか「悪意の塊」とか「バイオレンスプリンス」とかである。

因みに、僕と彼女との間でこれから行われるのは「密談」や、ましてや「猥談」などであるはずが無く、恐らく「脅迫」や「詰問」の類で、よくて精々「一方的な命令」と言ったところだろう。勿論責められるのは僕。

因みに、これから彼女にされる「あんなことやこんなこと」を考えると・・・体の震えが止まらない。

皆、本当に知萌の表向きの顔に騙されているな。

ま、別にいいけど。

騒ぎ立てる男子達を横目に教室を出る。後ろからは「ヒュ〜ヒュ〜」の大合唱。小学生かお前らは・・・いや、小学生でも今時言わないか。

ガラガラガラ・・・ドン。

とにかく五月蠅かったので教室の扉を後ろ手で閉めた。すると、それと同時にぷつぷつりと大合唱が終わる。本当に単純な奴らだ。・・・。

それでさてどうしたものか、目の前に居る知萌の笑顔が眩しくも恐ろしい。

「高岸君、私のこと悠の彼女だって言ってたね」

「あ、いやまあいつものことだし。気にしなくていいと思うよ」

「そうだね、いつものことだしね」

はにかんで少し頬を赤らめながらにこっと笑う知萌。彼女の裏の顔をよく知っている僕でさえ、一瞬ドキッとしてしまうほど無垢で可愛い笑顔。流石としか言いようが無い。この表情に男はみんな騙される。

「じゃ、行こか」

「どこ？」

「いつものところ」

ごく普通のやり取り。アニメとかでよくある「幼馴染、ただし友達以上恋人未満」的な関係の二人が演じるごく普通の有り触れたやり取り。演じている自分が恥ずかしくなるような、台本通りのやり取り。周りから見ればやっぱり付き合っているように見えるのだろう。クラスには変な奴が多いから、こう言った色恋沙汰は非常に貴重なのだ。

知萌が僕の彼女か・・・何とも恐ろしい話だが悪い気はしない。

二人で並んで廊下を歩く。特に会話をすることもなく、当然手を繋ぐこともなく、ただ二人で指し示したかのように「いつものところ

ろ」に向かう。

・・・いつものところ。それは地獄の一丁目。いや、実際はただ誰も使わなくなった美術準備室なのだが、高校に入学してから三年、そこから無事出られたという記憶はほとんどない。

どうということかって？

それはもうすぐ分かると思うよ。

ガチャ、ギイイイ

知萌は美術準備室の前に到着するや否や、扉を開けて中に侵入した。僕も続いて中に入る。一般の教室と違って横スライド式の扉ではなく、ノブを回して開けるタイプの扉である。もう誰も使っていないので壊れた鍵は修繕されていない。もうひとつ言うなら鍵を壊したのは知萌なわけだが、いつ来ても簡単に侵入できるというのは彼女にとって非常に都合のいいことなのだ

僕にとっては「開かれた無法地帯」ってところだが。

更に、この美術準備室は廊下の一番奥に位置している。当然隣には美術室があるわけだが、この美術室もほとんど（具体的には放課後の美術部員以外）誰も使っていないので、普通の人はまず近寄らない場所なのである。

つまり、不良が煙草を吸うにはトイレよりも安全な場所なのだ。

つまり、気に入らない転入生を連れ込んでボコるのに最適な場所なのだ。

つまり、誰も助けに来てくれないのだ。

つまり、ここはデッドスペースなのだ。

つまり、ここは知萌と僕にとって「いつものところ」なのだ。

ガチャ

扉が閉まると室内全体が薄暗かった。窓は付いているもののカーテンは完全に閉まっており、昼間の日差し of 侵入をほんの微量しか許さなかった。入ってきた扉のガラスも磨りガラス状で、廊下側からも光半分と言ったところである。この状況で確認できるのは、部

屋の形、大まかな部屋の広さ、大きいものの配置、小さいもののシルエットぐらいである。あ、勿論知萌の姿も確認できる。とは言っても、この暗さじゃその表情までは確認できないけど。

「もう、何ボケ〜っと突っ立ってんのよ。暗いと思ったらちゃっちゃと電気点ける」

知萌は少し急かすように言った。言い方も命令口調だし、言葉遣いも悪い。声優のように澄み切った声は・・・まあわざと変えているみたいけど、実際あまり変わっていないので、結局澄み切っているとは言わないものの、美声には違いなかった。

ただ、先程までのクラスのアイドルから大きく印象が変わっているのは間違いない。

「僕のことは気にしなくていいよ、知萌は暗くても平気だろ」

「はあ、何言ってるの悠？確かに私は多少暗くても無問題よ。あんなの情けない顔だってよく分かるんだから。でも、悠が私の顔を見えなかったら意味無いじゃない。大体あんた夜盲症でしょ、鳥目でしょ？人と会話をする時は相手の顔をしっかり見る。これ基本。それに私が電気を点けてと言った以上、悠にそれを拒む権利は無い」
権利が無いって言われちゃった・・・。

因みに僕は、夜盲症でも鳥目でもない。知萌の目が暗闇でも異常なくらいよく見えているだけなのだ。それはもう異常なくらい・・・色とかも判別できるらしい。って、新人類か。

ここぞとばかりに挑発的なポーズや反抗的な仕草をすると、恐ろしいスピードで僕の急所に拳が飛んで来る。過去に幾度となく経験済みだ。

「闇狩りの知萌」とでも命名しておこう。

暗闇での彼女は正に無敵なのだ。

パチッ

僕は知萌に言われたように証明のスイッチをオンにする。すると、当然の如く美術準備室の中がパツと明るく照らされた。素晴らしいことに、しばらく交換していないであろう蛍光灯は四本ともまだま

だ健在である。僕もそれを見習って長生きしたいものだ。

出来るものなら・・・今、目の前に居るこの女の子と一緒に。

姫心知萌。僕の幼馴染兼ご主人様。

別にご主人様と言っても本当に彼女に仕えているわけではないし、彼女が姫で僕が隠密なんてこともない。人目がある場所では本当にただの幼馴染なのだ。オシャレにもそれなりに気を使うし、美味しいものやカッコいい芸能人の話も大好き。はしゃいだり、照れたり、笑ったり、悲しんだり、怒ったり。感情豊かで可愛い女の子なのである。だからクラスで人気があるのも分かるし、ラブレターなどと古風な手法で（こっちの方が驚きだが）、男子達から告白されるのも十分に納得できる。肩の上辺りで切り揃えられた綺麗な黒髪に、茶色がかった黒い瞳。線が細く控えめなプロポーションはマニアには堪らないらしい。外国人留学生からも「オー、ヤマトナデシコ」と言われ、一緒に写真を撮っていた。

「大和撫子」か、なんとも優美で秀麗な響きじゃないか。

でもそれはあくまで知萌の表向きの顔。

いざ二人きりになると、

「眩しいだろうがー！」

ボコォー！

どこの外国人留学生だよ、コイツのこと「大和撫子」とか言ったのは。

薔薇だ、しかも青い薔薇、それも飛びつきり棘が多くて質の悪いやつ。バイオテクノロジーは、日本の女子をここまで凶暴化させてしまうのか。だとしたら本当に危険な技術だ。

怒声と共に右足から繰り出された鮮やかな蹴りは僕の横腹に見事にクリーンヒットした。見た目は華奢で細い脚。しかし、その脚から繰り出される足技には、見た目以上の重さと威力があることを僕は知っている。

流石に「自己流十段」は伊達じゃない。

因みに、「自己流」というのは本人曰く「空手」「柔道」「剣道」

など、あらゆる格闘技の使いどころばかりを集めて作った「総合格闘術」らしい。素人の僕には何だかよく分らないが、恐ろしく強いというのは間違いない。突然絡んできたチンピラ五人組を僕の前で秒殺したというのはまだ記憶に新しい話。個人的にはその後チンピラ達が味わった拷問の方が強烈ではあったが。

まあしかし、どうして年頃の女の子がそんな恐ろしいものを編み出してしまったかは皆目見当がつかない。

理由を聞くのにはそれなりのリスクが生じてしまいそうで怖いし、別に無理をして知ろうとも思わない。

深く詮索することもなく、彼女なら湘南最強の「鬼爆コンビ」や「金髪」と「トゲトゲ頭」の「ツツパリコンビ」にも勝てるのかもしれない。などと秘かに思っているわけだ。

それにしても、

・・・ああ、痛い。

内臓が中でぶちまけられたかと思うほどの激しい痛み、僕はその場で座り込み、必死で嗚咽を堪える。こんな「人間凶器」の中段蹴りをまともに食らって無事なはずが無い。

無事なはずが無いのだが、

僕だって、伊達や酔狂でこんな「人間凶器」の下僕をやっているわけではないんだ。

精神力で激痛を抑制し、渾身の力で立ち上がって笑顔を作る。

「相手が・・・僕じゃなかったら、結構危ないと思うよ、今の蹴り」
「相手が悠だったから大丈夫だって」

瞳からは今にも涙の粒が零れそう。僕は、少し笑顔を崩して言う。

「見ての通り、あまり大丈夫、でもないんだけどね」
零れた。

「おおう、悠ちゃんってば泣いちゃったよ。こらー、男だったら泣くなー。情けないぞー」

「痛いのは堪えられても、涙は堪えられないの。それに、知萌だっ

てこの間、映画館で号泣していただろ」

「何言ってるの、あれは泣くところだから仕方ないじゃない。一人の少年と恐竜との感動の別れのシーン・・・のずっと前に、友達を早くギャフンと言わせたいが為に「成長促進剤」なる邪道な薬品を投与され、何かよく分らん大陸に置き去りにされ、小さくされ大きくされ、ポケットの中に突っ込まれ、謎の黒ずくめの男にラブコールを送られ、それでもまだ少年のことを健気に想い続けた一匹の恐竜。あまりにも可哀そう過ぎて泣かずにはいられない。まあ、私が恐竜なら少年を噛み殺してるね間違いない。もしくは縊り殺してやりたいね。窒息死って顔は苦痛で醜く、おぞましく歪むんだって」
うわゝ、なにこの女の子。

最悪だゝ。

最凶だゝ。

変態だゝ。

ド外道だゝ。

「いや、それは多分泣くところが違うと思うんだけど」

「人それぞれ感性は違うんだって。個性とも言うし。個性は大切だよ。個性が無いと高校球児みたいになるぞ」

「あゝ、それ完全に見た目で判断してるね。そういうのはいけないと思うよ。彼ら一人一人にも当然それぞれ個性ってものがあるんだから。まあ、知萌みたいに、ズバ抜けて強烈な個性を持っている奴はそういないと思うけどね」

「悠と二人きりの時だけは特別。流石の私も常に「暴力女」のレッテルを張られて生きていくのはしんどいからね」

小悪魔のような表情でクスッと笑う知萌。

「二人きり」と「特別」という言葉を聞いて、僅かではあるが、心臓の鼓動が速くなるのを感じた。

「特別、そう特別よ。なんて言っちゃって悠は、この私、姫心知萌様の下僕なんだから」
ビシッ！

そう言って、知萌は僕を右手人差し指で指差す。その表情は優越感に、支配感に満ち満ちている。口元は、まるでこの世の支配を目論む魔王の様に歪に歪んでいる。

あまりの変貌。頭部はその人全体の印象を司ると言っても過言ではない。

今の彼女は、教室に居た時とはもう別人と呼んでも構わない域に達していた。

これが、僕の幼馴染兼ご主人様こと姫心知萌のもう一つの、裏の顔。僕のことを下僕扱いし、自分勝手に我がままで、粗雑で乱暴者。僕と家族以外の人間には絶対にひけらかさない「ダークサイド」の知萌である。

「何、何か文句でもあるわけ？」

不機嫌そうに僕の顔を睨みつけてくる。

眉間に皺を寄せて・・・少し怖い。

これ以上ご主人様を怒らせたら大変だ。

・・・

既に、先ほど蹴られた痛みはほぼ解消していた。

僕はすぐに涙を拭って今出来る最高の笑顔で答えた。

「光栄の極みだよ、知萌」

「当然ね」

知萌は、実に満足そうに微笑んだ。

「それで、僕に何か話があるんじゃないの」

これは、この美術準備室、いつものところに呼ばれたときから既に分かっていたこと。ここに僕を呼び出したときの知萌の目的と言え、ロクでもない話を吹っかけて来ることに決まっている。

あまり聞きたくないが、いずれ聞くことになるなら早い方がいいと思ったのだ。

「えっ、えー、そうそう話よ話。悠よく分ったわね」

「テレパシーです」

「えー、私の心を読んじやったの。それじゃ私、悠の前では恥ずかしくて生きていけない」

「はいはい」

ボコッ！

突然、左胸辺りに激痛が走った。その衝撃は一瞬にして僕の上半身全体に拡散する。

・・・すごく痛い。

なんて気の短い女の子なんだ。

・・・しかも、

「何、今の・・・全然見えなかったんだけど」

「サイコキネシスです」

「マジで！」

目視出来ないほど高速の突きを繰り返してくるなんて、似非エスパーもいいところだ。

我が主人ながら、恐ろしい女やな。

「って、そんな話はどうでもいいのよ。本題よ本題。なんで悠と一緒に居るとこんなに話がずれるかな」

貴方が超能力を使うからです・・・という突っ込みは入れない方がいいだろう。そんなことをしたら、今度は話ではなく、僕の体が吹っ飛ぶ。

間違いなくあると思います。

「で、話って何？」

「何いかにも不安そうに聞いてんのよ」

「そ、そんなことないさ」

三流役者のように答える。

そりゃ不安に決まっとうろうが。今まで自分がどんな話を持って来たか覚えてないのかえ？

ある先生のカツラ疑惑を体張って解明させられたり。

ビッグウェーブに乘ろうとか言って、わざわざ台風の日にサーフィンさせられたり。

明日までに、金のエンゼル一枚か、銀のエンゼル五枚調達してこいとか言われたり。

二日間で四国八十八箇所全部回ろうとか言い出したり。何にも特訓していないのに、突然フル馬拉ソンで完走して来いと命じられたり。

大食いメニューを間食してお小遣いを稼いでこいとか言われたり。とまあこんな感じに、数えだしたらキリが無い。因みに、僕はこれらの無茶を全て達成してきた。自慢じゃないが誰にでも出来ることではない。

・・・本当に自慢じゃなく、恥にしかないけど。
はあ。

「まあ、安心になって。今回は凄いいよ。「魔咎岳村」での、一泊二日の部活メンバーによる卒業合宿」

「まとがたけむら？卒業合宿？何だよそれ？第一、知萌も僕も帰宅部なのに、何の集まりの合宿だよ」

「同じクラスに加奈子っているでしょ。ほら、私の友達の。あの子の付添っていうか、まあ話を聞いて楽しそうだから、無理して割り込み参加させてもらったってわけ」

「加奈子って、妹木のことだよな」

その時、僕の背筋にゾクゾクッと悪寒が走った。

まいきかなこ
妹木加奈子、知萌や僕と同じクラスに所属する。知萌とは特に仲が良く、休み時間に話をしているところをよく目撃する。おっとりのんびりした性格と、極度の天然ボケが幸いしたのか、我がクラスではマスコットの存在として可愛がられている。

しかし、今問題なのはそんなことではない。

何をとち狂ったのか、我がクラスのマスコットキャラの所属クラブは・・・。

「まさか、心靈研究会の合宿なのか？」

「ファイナルアンサー？」

「ふあ、ファイナルアンサーだよ馬鹿野郎！！」

「・・・せいかい！」

「うわーん」

「次は遂に一千万です。・・・勿論」

「ドロップアウトさせていただきます」

「認めず」

「トモさん酷い。僕が怖いの手先だって知っているくせに、どうしてそうクリティカルなイベントを持ちかけてくるんだよ」

「加奈子から聞いた話ではその「魔咎岳村」っていうのはね」

「聞いちゃいねえ。まあ、反論するだけ無駄だろうし、もう諦めよう。」

「諦めいい僕。・・・いいお嫁さん欲しいな。」

「どうやら以前惨劇があり、廃村と化した恐怖の心霊スポットみたいなものよ」

「さんげきつすか」

「その惨劇って言うのは、どうも一晩のうちに「村人全員惨殺」ってことらしいのよ。で、その殺された村人達の霊が、夜な夜な生気を求めて彷徨っているって話」

「そんな馬鹿な、聞いたことないよそんな話」

「そう、その通りなのよ。そんな馬鹿な話があるわけ無いっての。ある巨大組織が事件そのものを隠蔽したって説もあるみたいだけど、どう考えてもこんなの眉唾物でしょ」

確かに、

「眉唾だ。もうフライングビューマノイド級の眉唾だ。そんなアニメやマンガみたいな話があるはずがない。説得力の欠片もない。信憑性が微塵も感じられない。幽霊なんて、所詮マイナスイメージ」

「オツケー、というわけでもう怖くない。悠も参加決定〜っ」と

あっ！

ちよっと調子に乗りすぎたかも。

でも、失言ってほどでもないか。

それにしてもよく言うよ。

参加決定。

そんなこと、この話をする前から決まっていたくせに。

そんなこと、こんなところに来る前から決まっていたくせに。

そんなこと、妹木からこの話を聞いた時から決まっていたくせに。

っていうか、もう既に参加者名簿に登録されてるんだろうな。僕。

ほんっと、人権無視だよな。

ま、別にそんなものはいらないけど。

僕にとっては、知萌の方がずっと大事だ。

それこそ眉唾物だって？

いいや眉唾じゃないよ。

当の僕が言うんだから間違いない。

これは本当の気持ち。

まったく、

「どうしてこんな奴のことが好きなのかな」

「ん、何か言った悠？」

「いいや、というよりそっちこそ何してんの？」

いつの間にか知萌は右肩をグルグル回してウォーミングアップ？

をしていた。・・・うわっ。

僕の背筋に、ゾクゾクツと二度目の悪寒。

「何って、とりあえず一通り話し終わったから、そろそろプールし

てたのを清算しようと思って」

「あゝ、僕何か悪いことしましたか？」

清算、イコール、鉄拳制裁。

「まず一つ目は、泣ける映画の件で、窒息死はいいよって言った

後に、悠の顔がちよっとだけ歪んだ。あの時、心の中で私の悪口言

ってたでしょ」

「なかなかの洞察力だね」

「これがともちゃんポイント一点。二つ目は、ファイナルアンサー

の件で、どさくさに紛れて私のことを馬鹿野郎と罵った」

「っていうかあんなのほとんどコントだろ？流してよ」

「これがともちゃんポイント一点。そして最後の3つ目は、テレパシーの件で私の乙女心を「はいはい」と軽くあしらったこと」

「ってそれは」

「これ、ともちゃんポイント五点ね。計七点」

乙女心デカッ！何か質の悪い詐欺にあったみたいだ。

「今日はとりあえず付けといて」

「付けはお断り。私の信条はいつもニコニコ現金払い」

「ごめん知萌、僕教室に財布を忘れてきちゃったみたいだ」

「それなら話は早いね、」

拳を握りしめ振りかざす。十分に射程範囲内だ。

あ、まっずいなく。このパターンか。

「つまり、お金が無いときゃ」

「体で払えー」

ドグシャッ

知萌と一緒に居ると人生の半分以上を寝て過ごすことになるけど。でも、全然飽きない。

君とのバカみたいな会話も、

君が持ってくる下らない話も、

裏表の激しいその性格も、

情け容赦無いこのストレートも、

僕は、楽しくて楽しくて仕方が無いんだよ。

1章 一 安らぎの空間、二つ 一 その3

目を覚ました時、僕は保健室のベッドの上だった。

視覚を使わなくても、嗅覚で分かる。

保健室独特の匂い、消毒液の匂いが鼻を突く。

理科室にも薬品は置いてあるが、それは有り得ない。理科室にベッドは普通存在しないし、匂いも全然違う。鼻を刺す臭いは嫌いだ。そして何より、学校内で意識が飛んだ時はいつもここに運ばれて来る。以前は病院に運ばれたこともあったが、基本はこの場所。入口から入って、二つ並んだ手前のベッド。手前に先客が居る時だけは奥のベッド。満員の時は、どちらかに出て行ってもらおう。保健室で授業をサボるのはよくないし、僕はかなりの重症だ。それくらい優遇されても罰は当たらない。

「今、何時だ」

扉のやや左上に設置された円型の掛け時計に目をやる。学校でお馴染みのやつだ。

時間を確認する。

「6時30分か、もうとくに学校終わってるな」

いつものところに呼び出されたのが、12時30分過ぎだから、約6時間弱意識が飛んでいたことになる。

ああ、5時から刑事ドラマ「相棒」の再放送があったのに見逃した。

まだ見たことのない話だったのに……。

仕方無い、今度DVDを借りよう。

杉下右京さんは天才です！

ガラガラガラ

突然、患者と患者を仕切るカーテンが開いた。

「ようやっとお目覚めかい。相変わらず青春してんね悠ちゃんは」

僕の視界に、白衣を着たやたらと胸がでかくてグラマーな姉ちゃ

んが飛び込んできた。

「これが青春だったとしたら、人生の冬は絶対に迎えたくないですね」

「にやははは、ごもつとも」

身体の妖艶さとは裏腹に、まるで子供のように笑う。

「全く、笑い事じゃないですよ丹雫先生」

「んにゃ、わりいわりい、すまんかったの」

丹雫にしずくこずえ梢。白衣を着ていることから分かるように、我が学園で唯一の保険医の先生。学園で、知萌と僕との裏の関係を知る唯一の人間。少し変な口調だが、きっぱりさっぱりした性格は好感が持てる。

実際、丹雫先生とは何でも気兼ねせず話す事ができ、感覚的には歳の離れたお姉さんという感じである。ただ、本人は歳のことを話すと酷くお冠になる。華の二十代の終わりに近づき、今だに結婚の相手が見つからない自分に少し焦りを感じているのかもしれない。「私は理想が高いのよ」とか、在り来りな強がりと言っていた。でもまあ確かに知萌とは正反対とも言えるナイスバディは、男を惹き付けるのには十分だろうし、顔立ちだって決して悪くない。先生目当てで保健室に入り浸る男子生徒も多い。入学当初から保健室の常連だった僕としては、静かに寝かせてくれという感じであったが。とにかく、魅力も人気も学園一番との呼び声が高い彼女なら、結婚なんてそれなりの男を捕まえて、いつでも可能なような気がする。そう考えると、もしかしたら強がりなんかじゃなくて、本当に理想が高すぎるだけなのかもしれない。本当のところ、丹雫先生のプライベートは謎に包まれているのでよく分らない。こちら側のことを色々話すことはあっても、先生側の話を聞くことはほとんどないのだ。

でも、先生には幸せになって欲しい。まだ若干、十八年と少ししか生きていない僕がこんなことを言うのは生意気かもしれないが、本当に心の底からそう思っている。学園内では、知萌を除けば間違はなく一番僕と親しい人物だし、話をしても楽しく、どこかおら

かな気持ちにさせてくれる。それが、彼女の性格故か、保険医であるが故かと聞かれれば、僕は迷わず前者だと答えるだろう。

普段、少し変わった人間に囲まれて生活している僕。

知萌もしかり。

クラスの連中もしかり。

アパートの住人もしかり。

何かと疲れることが多い人生・学園生活。もう一つの教室である保健室に丹雫先生が居ることは、非常に幸運だったと言える。

丹雫先生の性格・ノリは、僕にとっては「癒し」そのものなのだ。依存度は非常に高い。

だから、高校卒業まで約三カ月。もうすぐ、丹雫先生ともこうやって会えなくなるのだと考えると、少し寂しい気持ちになると共に「僕は果たして大丈夫なのだろうか？」などと、不安な気持ちなったりもするのだ。

まだ少し早いけど「三年間ありがとうございました」と言いたい。そしてその後に、

「これからよろしくお願いします」と言いたい。

丹雫先生との縁を、高校三年間だけで切ってしまうのはあまりにも勿体なさ過ぎる。

更に冗談を込めて、

「結婚式には呼んでください」と言ってみたらどうだろう。

・・・軽くどつかれそうだけど。

それならばと言う。僕自身、思いつきり、最高に見栄を張って言う。

「それじゃあ、知萌と僕の結婚式に来てくださいね」と。

すると、きつと丹雫先生は笑いながら言う、

「にやははは、千年早いんじゃないの。でも、もし呼んでくれるのなら行っただけ」と。

勿論呼びますよ。

呼ぶに決まっている。

丹雫先生を呼ばないとしたら、参列者は知萌側の人間だけになってしまう。

僕にとって丹雫先生は、それほど重要で、特別な人なのだ。特別で、大切な人なのだ。

――以下、丹雫氏本人が考えた、自己紹介文の内容。

皆さんこんにちは、学園のエンジェル、心は子供、見た目は大人、その名は丹雫梢です。巨乳に白衣って、鼻血ものだろう。妄想するなよ少年。歳は・・・聞くんだ歳。えっつとね歳は、教えてあげないよんだ・・・チャンチャン♪

ざくんねくん賞。

～中略～

ある時は美人保険医、ある時は妖艶な魔女、果たしてその実態は・

・

～中略～

というわけなので、困った時はいつでも保健室へいらっしやい。

ベッドの上で可愛がってあげるから。大人の女をたっぷり教えてあげ・る。

以上

「よっぽど、悠ちゃんは大人の女を知りたいらしいの」

「結構です。それに先生、心は子供なんじゃなかったんですか」

「あらん、ベッドの中では大人になっちゃうって言わなかったかしら。それに、体は年中大人よん」

何か変なスイッチに触れてしまったのか、丹雫先生は急に艶っぽい口調になった。

「おいで、坊や」

丹雫先生は、カモンカモンと手招きする。

美人保険医に誘惑される、欲求不満男子高校生。

傍から見るとそんな感じだろうか。

「もう、冗談はやめてくださいよ。それに僕は、幼児体型の方が好きですから」

きっぱりと言った。

実際幼児体型の方が好きなのかどうかは別として、早くこの状況から抜け出したかったのだ。

丹雫先生に限って、もしもなんてことはあるはずないけど、こんなところを偶然誰かに見られて、その噂が知萌の耳にでも入ったら僕は、間違いなくこの世から抹消される。

「幼児体型が好きね・・・知萌ちゃんに言いふらしてもいいのかな」
「絶対に止めてください。そんなことされたら」

僕は、間違いなくこの世から抹消される。

「にやははは、まあ冗談はさておき、分つてると思うけど、知萌ちゃんなら学校終わった後、一度様子を見て来てからすぐに帰ったぞ。なんだかドラマの再放送があるとか何とか・・・」

にやはははと笑う丹雫先生。

冗談だとさらっと流す丹雫先生。

僕としては、それが本当に、完膚なきほどに、体の隅々を流れる毛細血管に至るほどに冗談であって欲しい。そう願うしかない。

「知っていますよ。相棒のファーストシーズンです。僕も楽しみにしていたのに、酷い話です」

「自業自得。悠ちゃんが美術準備室で滑って転んでピーナス像に頭なんかぶつけるから・・・なんちて」

は、ピーナス像？

「今何と？」

「だから、悠ちゃんが滑って転んでピーナス像に頭を強打して気絶したって・・・まあ、学校ではそういうことになってるけど」

今回はそうきたか、知萌の奴。

またやりやがった。

「暇だからちょっと現場を見てきたんだけど、ピーナス像粉々だった

たのゝ。にやははは、頭をぶつただけであんなに粉々になるかって。すごいので、知萌ちゃんは。にやはははゝ」

偽装工作まで……。

ビーナス様。どうか、僕の愛しいご主人様を許してください。

「はあゝ」

大きく溜息をついて項垂れる。

知萌の暴挙っぷりは相変わらずである。

でも、怒ったりはしない。

怒りなんて感じるわけがない。

知萌のすることに対して、僕が怒りを感じることなんて有り得ない。

むしろ嬉しくなってくる。

知萌らしいなって。

やっぱり知萌だなって。

むしろ愉快になってくる。

知萌の下手な偽装工作に……。

それにまんまと騙されてしまう皆に……。

それを知っていて、内緒にしてくれている丹雫先生に……。

僕が、こんな気持ちになることに……。

「なゝにニヤニヤしてんの、この真性マゾ少年」

コッッ

丹雫先生は、僕の頭に握り拳を軽く落とした。

この状況で顔が綻んでしまう僕は、傍から見ればやっぱり相当ヤバい奴に見えるのだろう。一発殴って、喝を入れたくなるのも分かる。

でも、丹雫先生の場合はご愛敬。

何故なら僕の本心を知っているから。

「痛いです。僕六時間前に後頭部を強打しているんですよ……」

「にやははは、そりゃすまんかったのゝ。わりいわりい」

全く悪びれた様子もなく言う。

恐らく本当に悪いとは思っていない。

だからご愛敬。

このノリなら僕の大好物。きっと他のおかず無しでご飯三杯は楽勝である。

言うなれば、野沢菜とちりめんじゃこにポン酢を掛けたあの異常に美味しいやつ・・・それ位、丹雫先生とのやり取りは美味なのである。

「そうそう悠ちゃん、知萌ちゃんが帰る時に手紙を置いて行ったの。ほら枕元に。いいのゝ若いつてのは。羨ましいのゝ、ラブレターかのゝ」

「それだけは絶対有り得ません」

政治家が選挙演説で公約を語る時の様な断言的な口調で、速攻否定する。

「絶対に、ロクでもないことを書いているに決まっていますよ」

丹雫先生に言われるまで気づかなかったが、確かに枕元には四つ折りにされた紙が置かれていた。

しかも・・・二枚？

これは初めてのケースだ。

基本的に知萌と僕は一緒に下校する。ただ、何らかの用事（相棒の再放送など）があつて、手紙を残して知萌だけ先に帰るというケースは割とよくあることだ。しかし、その手紙が二枚もあるっていうのは今回が初めてである。

・・・少し怖い。

一枚はダミーか。

それとも罠？

折った紙の間にカッターの刃が仕込まれているとか。

まさか！

まさか本当にラブレター！！

一枚では書ききれなかった僕への想いを赤裸々に・・・だから、それは絶対無いって。

ちえっ、一度言ってみたかったんだよ。

だとしたら一体……。

ざわざわ……ざわざわ……

僕は、恐る恐る二枚の手紙の内の一枚を広げる。いつものことだが、僅かなずれもない、非の打ちようが無い完璧な四つ折りだった。性格に似合わず、手先が器用な知萌なのだ。

ガサガサ……ペラペラ……バサッ

手紙を完全に広げると、そこには手書きで何らや文字が書かれていた。小学校の先生のお手本を思わすような、ボールペンで書かれた綺麗な楷書体は、その一字一字が非常に力強く、これは知萌の印象にピツタリだった。

えーと何々……領収書……って、

「えっ！領収書！？」

不意打ちを食らったような感覚に、つい大きな声を出してしまった。その様子をじっと見ていた丹雫先生は、不思議そうな顔で僕の方を窺っている。

――領収書――

ともちゃんポイント七点分、確かに受け取りました。
すっきりさっぱりしました。

これからも宜しくお願いします。

知萌――

は？何これ？

知萌の新ネタなのか？いや、今回が初めてだから間違いなく新ネタだろう。

それにしても何なのこの内容。

確かに受け取りましたって……鉄拳を貰ったのは僕なんですけど。

これからも宜しくお願いしますって……つまりまたポイント貯

めてくださってことだよな。

は？は？

何これ？

滅茶苦茶嬉しいんですけど。

滅茶苦茶楽しいんですけど。

滅茶苦茶愉快なんですけど。

わざわざ領収書って・・・素敵過ぎます。

新鮮過ぎます、新し過ぎます、斬新過ぎます、可愛過ぎます。

うわー、僕のご主人様最高。

知萌最高。

「悠ちゃんさあ」

おっ！

気が付くと、いかにも不審そうな丹雫先生の顔が目の前にあった。

「まさか知萌ちゃんからお金を借りてたのかの」

不審者を問い詰めるような口調で言う。

お約束の展開。勿論、丹雫先生は本気でそんなことを思っているわけじゃないだろう。

「そんな、神に死んでくださいって言うような行為、どんなにお金に困っていても、畏怖の念が先行して出来ません。もしそれを出来るだけの大胆さと無謀さがあったら、今、僕はここに居ないでしょう」

「にやはははー、まあそう寂しいこと言うなって悠ちゃん」

子供の様な笑顔で笑う丹雫先生。

「どれどれ、ちょっと私にも見せてみな」

「あっ」

パスッ

丹雫先生は、ボクサーのジャブの様な仕草で、僕から領収書を奪い取った。

「そんな早業使わなくても、言ってくれば渡しますよ」

「逸る乙女の気持ちは止められない」

「はいはい、もういい年なんだから恥ずかしいこと言わない」

「にやははは。おい小僧、いくら相手が私でも言っていることと悪いことがあると思わないか」

「ごめんなさい、すみません、許してください、もう絶対に言いません、だからもうぶたないで」

「にやははは、そのキャラ何なの。ぶったりしないから、家に帰っておいで。顔を胸で挟んで快樂死させてあげるから」

「そんな死に方したら、知萌にメンチにされてしまう」

「悠ちん3割、牛肉5割、豚肉2割」

「うわっ、合い挽きされてるし僕」

「牛肉7割、豚肉3割でお店に売の」

「うわっ、某食品加工卸会社より立ち悪いじゃんか」

「・・・肉希望」

「夢も希望もねえよ！」

「ざくんねくん賞」

「ティッシュですか？」

「んにゃ石鹸」

「いらね」

「知萌ちんの生写真」

「激しく希望」

「それでオ○ニーするわけだ」

「否定はしませんよ」

「青春やの」

「どんな青春ですか？」

「百合最高、レズ最高」

「僕は男だっ！」

激しく話が脱線していく。議題が決まっているわけでもないが、逸れることしか知らない話なので、この話自体が脱線と言ってもいいのかもしれない。

知萌と話をする時も、丹雫先生と話をする時も、ほとんど突っ込

みに回る僕。どちらも非常に楽しい。

ただ知萌は、僕と丹雫先生がこんな話をしていることを知らない。丹雫先生が、知萌と僕の裏の関係を知っているということは当然知っているのだが、二人きりで居る時どんな話をしているかまでは知らないはずだ。

・・・知らないはずだ。

でも、どうしてそう言い切れる？

こんな、どこで誰が聞き耳を立てているか分からない場所で話を
していてどうして知らないと言い切れるのだろうか？

だって、こんなことを知ったら知萌は怒るだろう？

思い切り殴るだろう？

いや、そんなことは分からない。

僕が他の人と仲良くしていて、知萌が怒るってことは今まで無かった。

いつも「悠は私の下僕」だと言い切っていた知萌だけど、僕に対して我が儘なほどの独占欲を示したことは無かった。

そもそも、僕が他の人と特別仲良くするってことが今までほとんど無かった。

でも、

出来れば怒って欲しい。

それが僕の望み。

殴ってくれてもいい。

死なない程度にぶっ飛ばしてくれてもいい。

だってそれは、知萌がやきもちを焼いているみたいだから。

やきもちを焼くご主人様。

やきもちを焼く知萌。

これ以上に愛おしい存在を僕は知らない。

思わず抱きしめたくなるような、

思わず接吻をぶちかましたくなるような、

思わず犯してしまいたくなるような、

愛おしくて愛おしくて愛おしい存在。

翌日は、きつと暗い水の底に沈んでいるだろうけどね。

「ふーん、領収書ね。知萌ちゃんも可愛いことするの」

僕から掠め取った領収書を一目して率直な感想を述べる丹雫先生。
第二ラウンド開始。

「まったくですよ」

「にやははは、ともちゃんポイントだって、ますます可愛いのに
まったくですよ」

「七ポイントの……内訳は？」

「え」と確か、乙女心を傷つけたのが五ポイントだったっけな」

「まあ、罪な男」

「まったくですよ。下僕のくせに、ご主人様に恋心を抱いているなんて……大罪もいいところですよ」

「傲慢、嫉妬、憤怒、怠惰、強欲、暴食、色欲、悠ちんの恋心……
はい、八つの大罪の出来上がりやの」

「って、そういうのに固有名詞はやめてください」

「ウィキとかに載って有名になるの」

「有ること無いこと、色々書かれそうですね」

「でも、本当に悠ちゃんは知萌ちゃんにメロメロやの」

「メロメロです」

「知萌ちゃん命？」

「……命懸けですから」

「まあ、確かに知萌ちゃん可愛いからの」

「否定はしませんよ」

「知萌ちゃん手が早いからの」

「肯定しますよ」

「知萌ちゃん男子にもてるからの」

「あいつらだって、知萌のことをもっとよく知ったら裸足で逃げ出すでしょうね」

「そして悠ちゃんは裸で襲い掛かる」

「下品です」

「ケダモノ」

「命懸けの狩りです」

「悠ちゃんぽん酢取って」

「無理やり下品な言葉を並べるのは止めてください」

「知萌ちゃん」

「言わせねえよ！」

「満点大笑？」

「小笑です」

不毛で滑稽なやり取り。

無理やり終わらせないと、きつといつまでたっても終わらない。

「あつ、そう言えばもう一枚手紙があるんでしたね」

突然思い出したように言う。

一枚は領収書。もう一枚は・・・今度こそロクでもない内容に決まっている。

「おゝ、そういうやそうだったのゝ。悠ちゃん、読むべし」

「了解」

ペラペラ・・・パサッ

一枚目と同様、奇麗に折りたたまれた紙を広げる。

「うゝん、えゝとですな」

―我が親愛なる下僕ちゃんへ

私、今日は5時から「相棒」の再放送を見なくちゃいけないから、さっき伝え忘れたことを手紙で伝えることとします。

まずはじめに、明日の朝6時までには私の家まで来てね。魔咎岳村までは結構遠いらしいから出発は早いよ。交通手段のことなら心配はいらないから。心霊研究会の人が車持ってるみたいだから、それに皆で乗って向かうみたい。生意気だよねゝ、高校生のくせに車って。免許も取りたてだからちょっと危険な感じもするけど、私と悠

がいるんだから何があっても大丈夫。参加者は私たちを含めて9人、あとは全員心霊研究会の人達ばかりだ。加奈子は同じクラスだから知っていると思うけど、他の人は知らないだろう。お楽しみに。後、魔咎岳村のことで加奈子から直接聞いた情報だけ伝えておくから。耳の穴にバナナを突っ込んでよく聞きなさい。

魔咎岳村・・・どえらい昔、謎の殺人鬼によって、一晩の内に村人全員が惨殺された惨劇の村。山奥だったこともあり、その後廃墟となった。偶然にも立ち寄ってしまったら最後、惨殺された村人の悪霊に襲われて内臓を食べられてしまう・・・という話。更に、もし無事に出られたとしても、村人を惨殺したのち自殺した犯人の呪いに掛かり、その人も異常なまでの殺人衝動に駆られてしまう・・・という。

ね、何だか楽しそうな話でしょ。だから悠も誘ったの。本当に悠は優しくていいご主人様をもって幸せ者だね。

つきましては、悠の部屋インターネット使えるんだから出来るだけ情報を集めておいてね。旅を楽しむためには何事も事前調査が必须要ってわけでもよろしくね。頼りにしてるよ悠、ラブラブファイヤー炎の舞。

因みに、分つてると思うけど遅刻なんてしたら、見様見真似「知ちゃん槌閃」を見舞ってあげる。

あ、もうひとつ。

折角お出かけするんだから、卒業旅行と思って楽しもうね。

知萌

「以上、全文です」

相変わらず、意味分かんないな。

「ぎやはははははははははは・・・。もう最高。ぎやはははははははははは・・・たまんないっす・・・ぐあははははははははは・・・」

手紙を読み終えた瞬間、それまで明らかに口の中に空気をためて笑いをこらえていた丹雫先生の我慢が爆発した。その証拠に「にや

「ははは」ではなく「ぎやははは」と笑っている。後「ぐあははは」と。相当ツボにはまったのだろう。美人なのに台無しである。

「そんなに面白かったですか？」

「当り前じゃないの。何、今度もなかなか楽しそうなイベントじゃないの。まとがたけむら？すっごい楽しそうなところじゃないの。村人皆殺しって、んなことあるわけないっての。にやははは」

「楽しくないですよ・・・話の真偽はともかく、廃村ですよ廃村。それも、心霊研究会とか胡散臭い連中と一緒に・・・まあ、妹木は悪い子じゃないですけど」

「知萌ちゃんもいるじゃないの」

「知萌と一緒にじゃなかったらこんなところ行くわけ無いでしょう」

「青春して来い」

「今は冬です」

「フォーリンラブして来い」

「廃村は嫌です」

「まあまあそう半泣きになりなさんっての。こういうイベントって、後半には意外とおいしい展開が待っていたりするものよ」

「は？」

「選択肢一つで、最終誰と結ばれるか決まっちゃうから気をつけた方がいいよ」

「って、アドベンチャーゲームかよ。」

「僕は知萌一筋ですよ」

「じゃあ」

「!？」

そう言うと、丹雫先生はグッと僕の顔に近づき、ビシッと僕の顔を指差してきた。さっきまで下品に笑っていたのが嘘のようだ。珍しく顔は真剣そのものだった。

本当に珍しい。

雰囲気もいつもと少し違う。

こんな丹雫先生は初めてかもしれない。

「じゃあ、他の女の子なんかには目もくれず知萌ちゃんだけを狙って見たらどうなの」

「えっ・・・狙うって」

予想外の攻撃。防御に慣れているはずの僕でさえ、どう返していいのか分からない。

丹雫先生と3年。短いようで、長い付き合いだが、こんなのは間違いなく初めてである。

「自分の気持ちをストレートに伝えてみたらってこと。知萌ちゃんは鈍感そうだし、想っているだけじゃ、いつまでたっても今のままよ」僕の背中を押すように、諭すように言う。

いつも以上に優しく。

いつも以上に激しく。

「僕は・・・今のままでも構いません」

「永遠に？」

「・・・はい」

僕がそう答えると、丹雫先生の顔は徐々に緩んでいき、

「そっ」

すぐにいつも通り。子供の様な無邪気な笑みを浮かべていた。

「にやははは、そりゃ余計なこと言ってすまなかったの」

「いえ」

にやはははと笑う丹雫先生。

「それじゃあそろそろお帰りやの。ほらほら、もうとっくに7時回ってるし。部活の連中も帰って、今校舎に残っている生徒なんて悠ちんぐらいだって。私だって早く帰って、充実したアフターファイブを満喫したいの」

時計を確認すると、確かに時間は7時を5分程回っているところだった。丹雫先生と絡んでいると、時間が経つのが非常に速く感じる。

態度が急に素気なくなっただように感じるのは、別に僕の答えが気

に入らなかったわけではなく、いつものことである。アフターファイブを満喫したいからと言うのは、意外と本心なのかもしれない。だとしたら、部活の連中よりも遅くまで学校に残っていることが多い僕は、丹雫先生にとって充実したプライベートを過ごすための天敵なのだ。

つまり、その天敵を保健室へ送り込んでくる知萌は宿敵？

「ふっ」

思わず苦笑する。

確かに、知萌と丹雫先生なら色んな意味でなかなかいい勝負になるかもしれない。

「すみません。丹雫先生の貴重で重宝で宝石の様にキラキラと、三千と輝く星達よりも尚一層美しく光り輝き、世界中の人に夢と希望と勇気と愛を与え、神さえも不可侵で、悪魔でさえ介入することが許さず、大勢の天使達が何故か讃美歌を歌いまくる。そんな、壮大で壮麗なアフターファイブの時間を、いや究極にて極上のプライベートタイムを、僕みたいな変態マゾ野郎の為に使わせてしまつて本当にすみませんでした。どうぞこの後は壮大で壮麗なアフターファイブの時間、いや究極にして極上のプライ」

ゴッソッ

拳骨を食らった。

「痛いです」

さっきの唐突な質問の仕返しと言わんばかりに、皮肉だらけに慣れない攻撃を仕掛けてみたが、どうやら調子に乗りすぎたようだ。拳骨の威力が先程とは比べ物にならない。

落ち着いて考えれば・・・うん、調子に乗りすぎだ。

なぜ天使達が讃美歌を歌っていたのかは僕にも分らない。

「調子に乗りすぎました、すみません」

「分かればいいの。にやははは」

にやははと笑う丹雫先生。

はあ、やっぱいいいな丹雫先生は・・・。

「それじゃ、いい加減帰ります。知萌に頼まれた下調べもしないといけませんし」

「んにゃ。それじゃ悠ちん、また来週の」
「ういゝっす」

今日もありがとうございますと言って窓から飛び降りる。
スタツ

着地も決まった「10・0」。

「にやははは、悠ちん、着地乱れたの」

因みに、保健室は一階。飛び降りると言うほどの高さはないし、正確には着地も少し乱れたので満点は無理だろう。

丹雫先生も余計なところまでよく見てるな。

まあ・・・気分の問題だよ、気分の。

丹雫先生に後ろから見送られながら、校門に向かって校庭を歩きます。
だす。

一月下旬の午後7時過ぎ。当然の如く既に日は沈んでいた。僕が住んでいる街は、決して田舎というわけではないけど、学校の周りにはあまり建物が無いので正直暗い。

遠くに建ち並ぶ建物の鈍い光と、学校の光と、星と月の灯りのみ。通り魔が学生を狙うのなら、ここは正に打って付けの場所だ。

校門を出て、いつもの帰路につく。この三年間、月火水木金と毎日歩き続けた道だ。そろそろ飽きてもいいころだが、どうやらそういうわけにもいかない。

僕はこの道が好きだ。

何故なら。

幾度となく、知萌と一緒に、並んで歩いた道だから。

朝夕、雨の日も風の日も。

・・・知萌と一緒に。

そんな道を、嫌いになれるはずが無い。

どんなに寂れた田舎町も、排気に塗れた工業都市も、ゴミの様に

人が溢れる大都会も、

知萌と歩けばきっと好きになる。

でも、今日は一人だから、ただ暗いだけの道。

暗いのは嫌いだから少し早歩きで歩く。

帰路を進むにつれ、次第に周囲が明るくなってきた。

建物の灯りと、点在する街路灯の灯りと、星と月の灯り。

人通りもそれなりで、あまり意味もない会話が嫌でも耳に入ってくる。

明日が土曜日だからだろうか、人々の声が心なしか浮かれているように思える。

「ねえねえ、明日のデートどこに連れてってくれるの」

「ふふふ、それは明日のお楽しみさ」

「え、きになるう」

同じ年くらいの、いちやいやカップルとすれ違う。自然と耳に入ってきた会話は、やっぱりどうでもよくてつまらないものだった。でも、少なからず楽しそうだった。でも、少なからず幸せそうだった。

「・・・」

僕だって今が楽しくて仕方が無いさ。

僕だって今が幸せで仕方が無いさ。

でも僕には、そんな自分の楽しさなんかより百倍楽しんで欲しい人がいる。

でも僕には、そんな自分の幸せなんかより百倍幸せになって欲しい人がいる。

僕は、知萌と出会ってからここまでずっと、彼女の思い通りになりたいと思って生きてきた。

人間は誰だって楽しく生きたいと思っている。人間は誰だって幸せになりたくて生きている。それが人間の本質であって本能である。だから僕は、知萌の望むとおりに振る舞って、思い通りに操られて、期待通りに吹っ飛ばされて昇天する。

そんなことで、

そんな簡単なことで知萌が喜んでくれるなら、

そんな簡単なことで知萌が幸せを感じてくれるなら、

僕はいくらでも道化になろう、傀儡になろう、サンドバッグになろう。

その見返りが、あの憎たらしくてしょうがないくらい悪い笑顔だと言うのなら、結局のところ僕の丸儲けだけど。

・・・僕は、知萌が好きだから。

「恥ずかしい心の声禁止!」

・・・恥ずかしい。

「でも、心の中でならいくらでも言えるんだよね」

僕は立ち止まって、誰にも聞こえないような小さな声で呟いた。

「自分の気持ちをストレートに伝えてみたらってこと。知萌ちゃんは鈍感そうだし、想っているだけじゃ、いつまでたっても今のままよ」

足を止めたまま、先程の丹雫先生の言葉を思い出す。

・・・やけに不意打ちだった。

「僕は・・・今のままでも構いません」

あまりにも突然聞かれたから、僕はこう答えるしかなかった。

いや、どんなに考えたところでこれよりも適切な答えは出せないかもしれない。

ただ、付け加えて僕は言うことができる。

僕が、知萌と恋人同士になれるたった一つの条件。

「知萌がそれを望むのなら、僕はいつだって告白するよ」

・・・望むのなら告白するだって。

「ククッ・・・」

思わず笑いが漏れる。

何だよそれ? いくらなんでもカッコ悪すぎるだろ。

「ククククッ・・・」

でも、そんなカッコ悪いことでも、滑稽なことでも、僕が言ったら何だか少しカッコよく思えるのは、僕だから?

「は？理由になつて無いって、にやははは・・・」

にやはははと笑ってしまった僕。

面白くて面白くて、自分でも気付かないうちに声のボリュームが上がっていったようだ。周りを見渡すと、突然笑い出した僕に皆注目している。

驚嘆や驚愕を秘めた目と、変人や変態、奇人や狂人を見るような冷やかな目が入り混じる。

「いっけね、明日までに調べごとがあつたんだ・・・梢ウィルスに感染している場合じゃないって」

急発進した僕は、そのまま一度も止まることなく、歩きなれた通学路をひたすら走って行った。

2章 一 掛け替えない輪、一周 一 その1

出会った頃は、大嫌いだった。

こんなにも鬱陶しい女子はいないと思った。

本当にウザかった。

何だよこいつはと思った。

死ねばいいのと思った。

殺してやりたいと思った

でも、間違いなく特別だった。

ほかの連中とは明らかに違っていた。

僕にとって特別な「特別」。

だから・・・特別だと気付いた瞬間。

彼女のことが好きだと気付いた。

彼女のことが大切だと気付いた。

こんな無力な僕だけど、これからもずっと一緒に居て欲しいと心からそう思った。

こんな非力な僕だけど、これからもずっと一緒に居て欲しいと心からそう願った。

ジリリリリリリ・・・バチッ

けたたましいアラームの音で目を覚ました僕は、すぐにいつもの感覚でアラームを止め、しょぼつく目を全力で見開きながら時間を確認する。

5時だった。

5時にアラームが鳴るようにセットしたのだから当たり前だ。

寝る前に5回程チェックしたので、そこで狂いが生じるはずが無い。電池だって突然切れて止まってしまわないように、半年に一回交換することになっている。中途半端に使った電池は、テレビのリモコンなどに使用して、その儂い一生を全うさせてやればいい。

「ねむちい」

枕元に置かれた目覚まし時計。僕の部屋の時計と言ったらこれ以外に無い。携帯でも時間は確認できるが、そんな無粋ことはしたくない。部屋の中で時間を確認するとしたら、いつもこのアナログ式目覚まし時計なのだ。

質素なデザインに在り来りなフォルム。アラームもアナログで、昔ながらのベルである。でも、ポリウムマックス時の轟音は、そんなにそこらのアラームなど目ではなく、少し時間が経過した今でも耳の中に軽く音が残っている。この音を聞いて起きない奴はそう滅多にいないだろう。皮を剥かず毒リングにがついた白雪姫だって、まるでコントのように飛び起きるはずだ。薄い壁で仕切られた、お隣の住人も普通なら迷惑なことだろう。

普通ならね・・・。

・・・幸か不幸か、このアパートにはそんな些細なことを気にする人は誰一人として居ないのだけだ。

まあそういうことなので、この目覚まし時計は、時計としても、目覚ましとしても正にプロフェッショナルと言っているのかもしれない。寝ぼすけの僕が、遅刻しないで生きていくには、これくらいのパートナーが必要なのだ。

昨日の夜。

帰ってきてから、飯も食わずに、風呂にも入らずにパソコンとにらめっこを永遠と3時間。結局、魔咎岳村についてそれほど決定的な情報を得ることは出来なかった。

でも、まあ知萌は単純だから、適当に話を組み合わせればそれに満足してくれるだろう。マイナーな話には、マイナーな話なりの面白さってものがあるのだ。ただし、恐い話は正直お断りだけど僕は、まだ完全に覚めきっていない目をゴシゴシ擦りながら起き上った。昨日あれだけ寝たのにまだ眠い。「気絶」と「睡眠」は根本的に違うものだというのを改めて思い知らされた。

でも、眠たいからと言って、これ以上寝ているわけにもいかない。

約束の時間（約束した覚えは無いけど）にたった1秒でも遅れると、それこそ永遠の眠りについてしまうことになりかねない。

そんなご主人様の逆鱗に触れてしまわないよう、下僕の僕には常に30分前行動が義務付けられているのだ。そう考えると、いくら知萌の家まで歩いて30秒とはいえ、5時起きはギリギリのラインなのである。

僕は、眠気覚ましと言わんばかりに（本当は昨日帰ってから風呂に入っていないだけだが）朝シャンして、急いで身支度を行った。5時25分。

わざと少し冷ための水でシャワーを浴びたので、目はもう完全に覚めていた。視界良好、思考良好、気分は・・・そこそこだ。

荷物は特に用意していない。一泊二日なら着替えがなくても何とかなるし、寝袋くらいなら心靈研究会の方で準備してくれるはずだ。わざわざこちらから持っていくようなものでもない。

僕は、特に何も持たずに玄関のドアを開けた。一月の冷たい外気が一気に中に傾れ込んでくる。今の時間帯、当然のことながら外は真っ暗だった。天気予報によると、今日からしばらくの間、最低気温は氷点下を記録するそうだ。雨が降れば、夜更けを待つことなく雪に変わるだろう。防寒対策として厚手のコートを羽織っているが、それでも気を抜けば自然と身震いしてしまう。冬もこれから遂に大詰めと言った寒さである。

こんな寒さの中、完全に肌が露出している顔と手が可哀相だ。でも、手袋をしていくと、知萌が「お、グローブをつけて私とバトる気か。おもしれえー」とか言って理不尽なほどボコボコにされる。顔に関しては・・・狐のお面でもしていくか。知萌は面白がるかもしれないが、周囲の人間の視線が寒いだろうな。大して防寒にもなっていないだろうし・・・。

「魔咎岳村も寒そうだな」

今から心配になってきた・・・いや、あらかじめ心配はしていたが、この寒さの中、野宿同然の廃村で夜を越す事が出来るのだろうか

か。

冬は寒いから嫌いだ。

春は眠たくなるから嫌いだ。

夏は暑いから嫌いだ。

秋は哀愁を誘うから嫌いだ。

・・・まったく、人間とは本当に我が儘な生き物である。
ボタンツ・・・ガチャガチ・・・ドンドン。

扉の鍵を閉めた後、ノブを捻って二度三度手前に引っ張る。勿論、本当に鍵が掛かったか確認するためだ。

近頃、労もせず金儲けをしようとする不屈きな連中が増えている。まあ、リスクを考えれば、真面目に働いた方がよっぽど楽にお金が入ると言えなくもないが。

貯金通帳の中身より、デスクトップパソコンの方が高いという、純度90%の貧乏学生だが、自分の部屋を知らない奴に踏み荒らされるのは絶対にご免なのだ。

公園で段ボールを食べながら暮らすというのはもったご免だ。

今時何のセキュリティにもなっていない普通の施錠だが、まあ無いよりはましなので、掛けられるものなら掛けるに越したことは無い。それに、いざ盗みに入られたときの言い訳にもなる。

「・・・寒い」

吐息は、沸騰するやかんの湯気のように白かった。周りが暗くてもそれははっきりと分かる。息を大きく吸い込んで、「ピュ」と叫びながら吐き出すと・・・あっという間に「人間やかん」の完成だ。カツカツカツカツ・・・。

靴底と鉄とがぶつかり合う音だけが、朝の静けさの中に心地良いリズムを刻んでいく。

寒いのも暗いのも嫌いだが、朝の空気は嫌いじゃない。

三階から一気に螺旋階段を駆け下りると、そこからはもう街路灯で薄らと照らされている知萌の家を確認することができた。先ほども言ったように、歩いて30秒だ。

このアパートを選んだ理由として大きいのは「ネット繋ぎ放題（光）」と「オール電化」だが、その前提条件として「知萌の家の近く」ということがあったのだ。

ご主人様のピンチ（暇潰し、宿題代行、ストレス解消、呼んでみただけなど）にすぐさま駆けつけられることも、一下僕としての大切な要素なのである。

そういうこともあるので、知萌の家の前にはあつという間に到着した。築それなりになるだろう二階構成の一戸建て。敷地面積もそれなりに広い。

実はと言うと、色々事情があり、数年ほどこの家にご厄介になっていた時期もある。だから、姫心家の内情については意外と詳しいし、知萌の家族には今もずっと親しくしてもらっている。

構成は、知萌、知萌の父親の吉朗さん、母親の恵美さん、弟の友一君、そして妹の恋夏ちゃんれんげの5人家族である。

核家族とはいえ、それぞれ個性豊かな子供が3人もいるのだから、非常に賑やかで常に笑いが絶えない。一人っ子が主流で、高齢化が深刻な問題となっている昨今、皆も姫心家を見習うべきだろう。それに、これまた昨今問題の家庭崩壊が起きている家族だが、姫心家から学ぶことは多いのではないか。僕から見れば、姫心家は理想の家族であり、ここまで愉快的な家族はそうそうあるものじゃない。

僕も、以前はその輪に入っていたわけだから、その楽しさと馬鹿馬鹿しさは間違いなく本物である。

本当に楽しかったな。

たかだか三年前のことなのだが、しみじみ思いたす。とにかく充実していたのだ。

高校へ上がると共に一人暮らしを決めたのだが、こんなことなら吉朗さんのお言葉に甘えて、もう少し居候させてもらうべきだったのかもしれない。皆が引き留めようとしてくれたのに、少し意地を張ってアパートを借りたのだ。・・・恋夏ちゃんは泣いていたっけな。

嬉しさ半分・・・

いや、嬉しさ八割、悲しさ二割ってところかな。

こんな僕のことを本当の家族の様に想って泣いてくれたのだから・

・もう嬉しくて嬉しくて仕方が無かった。

ま、知萌からすれば「下僕も当然家族の一員」って感じだったけど。

・・・らしいと言えbraしいか。

かと言って、今が楽しくないかって聞かれれば・・・そんなことは無いけどね。

姫心家の玄関扉の前に立ち、インターフォンを鳴らすかどうか少し迷う。

現在の時刻は、恐らく5時30分前後・・・知萌は間違いなくまだ寝ているだろう。手紙には、6時までに来いって書いていたけど、その時間になっても起きて来ないことなんてざらである。出発が早いというのも、なにやら怪しい話である。ただの嫌がらせという可能性もある。「寒いと体が鍛えられるでしょ」とか、訳が分からないことを言い出すかもしれない。

だとすると、休日のこんな朝早くに訪問するのは迷惑かもしれない。以前にもこんなことがあって、その時は非常に眠たそうな、パジャマ姿の恵美さんが出て来て、寝起き感が丸出しだった。「すみませんこんな朝早く」とお詫びすると「いいのよ、こちらこそいつもともちゃんの無茶に付き合わせちゃってごめんね」と理解を示してくれた。きっとあらかじめ僕が来ることを知っていたのだろう。あまりに等身大の姿がその証拠だった。

さて・・・今回はどうするべきか。

姫心家を見回してみるが・・・どの部屋にも灯りは灯っていない。周囲の家を見渡してみても、電気がついていいる家はほとんどなく、それも疎らである。

当然と言えば当然ではあるが・・・。

「寒いです」

しかし、そんなことを考えている内も、冬の冷気は激しく僕を責め立てる。手が凍えて少しずつ感覚が無くなっていく。少しでも紛らわそうと、手に息をハアハアと吹き掛けてみたが、正に焼け石に水、凍える手に吐息だった。

それにしても、僕は何て滑稽なのだろう。人の家の前でずっと突っ立って、寒さに震えているなんて。他人から見ると、ただの不審者にしか見えないかもしれない。

「ほんとに僕って馬鹿みたいだな・・・」

ぶつぶつと呟きながら、インターフォンを鳴らそうとボタンに手を伸ばしたその刹那、何の前触れもなく玄関に明かりが灯った。言うまでもなく、僕はまだインターフォンを鳴らしていない。

そして、

ガチャン・・・カチャ、キィ

内側から鍵を開ける音が聞こえた後、突然キィッと玄関の扉がゆっくり開く。僕は慌てず一歩下がり、様子を窺う。

扉が完全に開く。

「まったく、寒いのなら早く呼び鈴鳴らしなさいって、ほんとに悠って馬鹿ね。・・・おはよう」

「おはよう」

いつものように、憎たらしいくらい悪い笑顔。

出迎えてくれたのは、僕にとっては最も意外な人物だった。

「いつまでそんなところで突っ立ってるつもり？別に私は朝刊を取りに来たわけじゃないんだからね」

つまり、僕を出迎えに来てくれたってこと・・・何だか嬉しい。そしてビックリだ。

「って言うか、今日姫心家の中で、恐らく一番最後に顔を合わせるだろうと予想していた知萌といきなり遭遇して、僕は新鮮な驚きと喜びを感じているところなんだけど・・・一体どうして？」

これは、今までの統計から出た予想だったが、ほぼ100%に近い確率だったので間違いないと思っていた。

こんなイレギュラーなこともあるんだな。

「あつ、もしかして今日は朝早いから珍しく知萌も早起きをしていたとか」

この場面において、それが一番妥当な答えだと考えた。知萌はまだパジャマ姿で、寝癖も跳ねまくっているが、今から準備すれば6時過ぎには出発できるだろう。

「あゝ、あれは悠が社会人になった時に早起きできるようにと設定した時間だから。ご主人様の愛情ってやつ。くうゝ、私ってなんて優しいんだろうね。因みに心霊研究会の皆が迎えに来てくれるのは9時過ぎってことになっているから」

「やつぱりかよ・・・じゃあ何で今日はこんなに早起きなんだよ？」

「朝から悠は元気だね。ってか、さっきから聞いてれば遠回しに私の悪口言っていない？」

知萌の表情が少し険しいものに変わる。

「いや言って無いって・・・滅相もございません」

体の前で両手を左右に振りながら否定する。朝からいきなり気を失って、気付いた時にはもう知らない場所に居た的な展開はとりあえず避けたい。

「ふうん、そう言うのなら信じてあげる。まあ、そんな大した理由じゃないよ。ちよつとね、お父さんとお母さんが今日から旅行に行くみたいだから、私は早起きして朝ごはん作らなきゃいけないってこと」

「あゝ、最近始まった「朝食は家族でローテして作ろうぜ」ってやつだね。僕がいた頃には無かったもんね」

「そうそう、もう面倒なのよね料理って・・・」

「・・・」

「何よ？」

「いや、別に」

「よし、そんなに言うんだったら悠にも食わしてあげる。どうせ朝食食って無いんでしょ」

「いや、何も言って無いし。それに朝食は食べて・・・食べて・・・」

「無いんでしょ」

「・・・はい」

「おっけー、ご主人様の愛情がたっぷりこもった朝食を作るからね」

「わ、わーい・・・嬉しいな」

・・・何てことだ。まさかこんなにも美味しくない展開が待っているとは。僕はまだ死にたくないです。

本来なら、愛すべきご主人様の手料理が食べられる展開は、この上なくおいしいはずなのだが、なんと言うか・・・その、お約束かもしれないが、知萌の作る料理は「クソ」がつくほど不味い。以前に何度か食べたことはあるが、コンクリートを食った方がまだマシなんじゃないかと思えるほどの殺人的料理。蝸牛の食生活が羨ましくなるくらいだ。

しかも、下手に不味いと言ったり、吐いたりとかは出来ないので・

・地獄だった。

・・・あの地獄が再び。

っていうか、何で姫心家は「朝食は家族がローテして作ろうぜ」なんて無謀なことを始めたのだろう。知萌の料理がヤバイって知っていたはずなのに。

聞いた話によると、吉朗さんは泡吹いて昇天したらしいし、友一君は病院送りになったみたいだ。恋夏ちゃんは・・・確か、とても美味しいって言ってたけど・・・脅されてるの？それとも、味覚が死んでしまっているのだろうか。

兎にも角にも、食べるのには勇氣と勇氣と勇氣と覚悟が必要だということだ。

「どうしてこんな奴のこと好きなのかな」

「ん、何か言った」

「いや何も・・・朝食作るの手伝おうか？」

僕は一人暮らしだが、決して料理が出来るわけではない。だが、知萌が作るのよりは幾分かマシなはずだ。二人で作れば、殺傷能力はそれなりに中和されるのではないか。

そもそも、知萌の料理は普通の人作り出せる料理ではない。

正に「神の料理」・・・あるいは神をも殺す「神殺しの料理」と言うべきか。

ぜひ、僕と一緒に朝食を作ってください！

「ダメ」

速攻で拒否された。

強風に煽られて、命のともし火が消えかけた瞬間だった。

「ってか何？そんなに私の手料理を食べたくないわけ・・・正直に言っちゃえ、正直に言っちゃえばきつと楽になるよ」

正直に言くと、その答えはイエスだ。限りなく、一片の淀みもなくイエスだ。

「いいや、折角知萌が朝食を作ってくれるんだ・・・例えどんなに不味かろうが臭かろうが、僕は喜んで食べるよ」

あっ・・・言っちゃった。なんかついノリで遠回しに言っちゃった。

「そう。安心して、私の料理は超美味しいから」

そう言うと、知萌はニツコリと微笑んだ。あのいつもの、憎たらしいくらい悪い表情ではなく、どっちかと言えばライトサイドの知萌の笑顔に近い気がする。

どういうことだろうか？最低でも病院行きは覚悟したのに・・・朝だからまだ本調子じゃないとか。いや、今までの経験上、寝起きの手の早さは最悪のはずだ。

でも、まあいいか。

痛いのと不味いのとは、痛い方がマシだが、また姫心家の皆さんに迷惑を掛けることを考えれば「救急車」は来ないに越したこと

は無い。もつとも、不味い方に救急車が絶対必要ないという確証があるわけじゃないんだけど。

それにしても、超美味しいとはどこの口が言ったものか……。

僕はダイニングでテレビでも見て待っていてくれと指示されたので、おとなしくそれに従った。とは言っても時間は朝の5時35分、見る番組はニュースぐらいしか無かった。

長野県で起きた山火事、ようやく鎮火。焼失面積およそ200平方キロメートル。

京都連続通り魔事件、犯人逃走……足取り掴めず。

本日は、全国的に快晴の一日でしょう。

カタカタカタ……ジュッ

ニュースを見ている間、ずっと知萌が何かを調理している音が耳に入ってきた。これだけ聞けば結構まともな感じなのだが、現実はそのなにごくは無いだろう。

「美味しそうな匂い」と言うのはなんとなく分かるが「美味しそうな音」というのは多分間違いだと思う。

トントントン……

と、そんなことを考えている内に二階の寝室から誰かが下に降りてくる音が聞こえてきた。

……この足音は。

「おはようございます恵美さん」

恵美さんだった。

「悠君、おはよう」

恵美さんは、僕が居ることに大して驚くでもなく、大きく伸びをしながら挨拶を返してきた。

「ほんとにいつもいつもごめんなさいね」

「あ、いえ、僕は別に構いませんよ」

「萌ちゃんは今、朝ごはん作ってるみたいね」

恵美さんはそう言って、僕の反応を確認する。

助けてください恵美さん。僕はこんなところで死ぬべき男じゃないんです。

僕は、天下統一を成し遂げる男です（意味不明）。

「・・・あ、心配しなくて大丈夫よ悠君。ともちゃんの料理、このところ随分上達しているから」

流石は恵美さん。僕の様子から、本日の姫心家「地獄の朝食会」の参加者リストに僕が加わっていることを読み取ったのだ。

でも、知萌の料理が上達したっていうのは・・・意外な情報だった。

恵美さんがそう言うのなら、きっとそれは間違いないと思うし、当然僕にとっては朗報だった。恵美さんは、誰かに一度天国を味あわせてから地獄に突き落とすようなことはしない。

まあ元の料理があれなので、上達したと言ってもあまり期待はしない方がいいかもしれないが・・・。

辛いのが苦手な人にとっては、激辛も超激辛も対して変わらない。「あ、でも恋夏ちゃんは、最近お姉ちゃんの料理、味が落ちたねって言ってたかしら」

・・・やっぱり味覚が死んでるのかな恋夏ちゃん。

「おっす、おはよう悠ちゃん。今日も相変わらず可愛いね」

「おはようございます吉朗さん。っていうか、それは褒め言葉になってないですよ」

次に降りてきたのは吉朗さんだった。

どこへ旅行に行くかは知らないが、二人とも随分とゆっくりしている。知萌が早起した理由がそれだから、もっと急いでるかと思っただけど・・・温泉旅行にでも行くのだろうか？

「おおそうか、それはすまんすまん。しかし悠ちゃんはその娘達よりも数段可愛いぞ。はっはっはっはっ」

まったく、この人は。

「でもまあ、僕はカッコいい男として生きていくのはどうも無理みたいなので、可愛い系のキャラを貫いた方が人生楽しめそうですね。

そう考えると吉朗さんが僕のことを可愛いと言ってくれることに關しては素直に喜んでいいのかもしれない……」

「悠君、別に無理してよっちゃん（恵美が吉朗を呼ぶ時の名）を立ててくれなくてもいいのよ」

「そうですね。父さんは痛い目に遭わないとすぐに調子に乗りますから、一度思い切り殴っちゃってください。いつも姉さんに、酷い目に遭わされているんですから、それくらい許されるはずですよっ！」

「わーい、お兄ちゃんだあー」
わっ！

気が付くと、いつの間にか僕の左隣に友一君が、右隣に恋夏ちゃんが居た。友一君はいつも通りクールで、恋夏ちゃんはいつも通りテンションが高い。

それに、どういうわけか友一君は既に外行きの服に着替えていた。こんな朝早くにどこか出掛けるのだろうか？

「おはよう、友一君、恋夏ちゃん」

「おはようございます」

「おはようお兄ちゃん」

友一君は表情一つ変えずに軽く頭を下げ、恋夏ちゃんは僕に抱き付きながら元気一杯に挨拶をする。

この二人も相変わらずだな。

「と言うわけで父さん母さん、俺は朝食を食べてきます」

そう言うと、友一君は玄関に向かう。

どういふことだ？

「ちよつとストゥップゆう君、逃がさないよ」

吉朗さんが、友一君の腕を力強く握る。

一人で朝食を食べに行くなんて……最近の友一君はグレてるのか。

「離してくれ父さん、僕はこの若さで死にたくないんだ。姉さんの料理と吉野家の牛丼、僕だったらたとえ千円払ってでも吉野家の牛

丼を選ぶ！」

友一君は必死に訴えかける。目がマジだ。

ああそういうことか・・・どうりで外行きの服で降りてきたわけだ。

友一君、以前病院に運ばれたって言ってたもんなく。

可哀相に・・・トラウマになっちゃったんだね。

そして、吉朗さんは泡を吹いて昇天した。

なるほど。吉朗さんが友一君の腕を握る力強さは・・・お前だけ逃がすかつという意味が込められていたようだ。

だったら朝食係をローテさせるのを止めればいいのと思うが、そんなことがあってもそう簡単に止めないだろうなと思えるのが、またこの家族の愉快なところだ。

「そりゃ父さんだって吉野家を選ぶぞ。いや、すき屋でもいいぞ。いいや、コンビニ弁当だったとしても千円払って食べるぞ」

そこまで言うなら、朝食抜きでもいいんじゃないかと思うのだが、そこは千円を払ってでも何かを食べようとする意地と言うかなんと言うか・・・その場のノリだ。

「ゆうちゃんはどうしてお姉ちゃんの料理をそんなに嫌ってるの・・・あんなに美味しいのに」

出たっ、恋夏ちゃんの問題発言。

しかし、さらっと言うなく。

「いいね恋夏は。姉さんの作った料理も、吉野家の牛丼も、極上のステーキも・・・何食べても同じ味なんだろうね」

「違うよ、その中だったらお姉ちゃんのが一番美味しいよ」

・・・ダメだ、完全に死んでいる。

恋夏ちゃんはまだ小学生だから朝食係は免除されているみたいだけど、もしかしたらこれは知萌に匹敵するくらいの逸材なのかもしれない。

そう考えると、体中にゾクゾクっと悪寒を走り、自然と鳥肌が立った。

月曜日は知萌の料理♪

火曜日は恋夏ちゃんの料理♪

土曜日は知萌の料理♪

日曜日は恋夏ちゃんの料理♪

・・・週4日の地獄。

ご愁傷様友一君。

恵美さんの作る料理は絶品なのに、何がどう間違えてこんなことになってしまったのだろう。

吉朗さんの料理は・・・特に何も話を聞かないところから、別にそれほど悪くはないはずなただけ。

ドンッ！

「きゃっ」

大地震を思わすような瞬間的な震動と、爆竹が破裂するかのような激音が家中に響き渡る。その突然の出来事に、ずっと僕に抱きついていた恋夏ちゃんは軽く悲鳴を漏らし、吉朗さんと友一君はビクッと体を凍りつかせた。ただ、恵美さんだけはこうなることが分かっていたかの様に、特に反応は無く、いつも通りニコニコしていた。僕としたことが、一瞬彼女のことを忘れていたなんて。

「さっきから随分言いたい放題言ってくれてるみたいね、お父さん、友一い、それに悠あ」

僕の背後、ダイニングから現れたのは魔王・・・いや、目つきがいつも以上に凄まじく怖い知萌だった。先程の地震は、彼女が強く床を踏みならした衝撃だったのだ。台所とダイニング、そしてリビングは隣同士で繋がっている。知萌の調理する音が聞こえるんだから、こちらの会話が向こうまで聞こえるのも至極当然のことだった。っていうか、何で僕も含まれてるいるんだ？

巻き添え？とぼちちり？・・・それともさっきのツケ？

「やあ、ともちゃん、我が愛しき娘よ・・・今日はご機嫌斜めかね。はっはっはっ、そんな睨むなよ。キュートなお顔が台無しだぜ」

「ね、姉さんおはようございます。俺、これから友達バイト先の

飯屋で朝食奢ってもらうことになっているから・・・じゃあこれで」
この状況に陥っても、なおここから逃げ出そうとする友一君は立派だった。しかし、あくまでクールに言い放ってはいたが、その体は小刻みに震えていた。

因みに、中学生が牛丼屋でバイトするのは、恐らく禁止されている。

頑張れ友一君、生きていればきつといいことがあるぞ。

ギムツ、グググツ

「ううっ」

知萌は吉朗さんと友一君の後襟を両手で掴み、そのまま力任せに上に持ち上げた。そうすると、まるでフォークリフトの様に、何の抵抗もなく二人の体は宙に浮いた。

抵抗は出来ない。

恐ろしいパワーである。決して大柄とは言えない二人だが、軽く見積もっても50キロと50キロ・・・100キロ近くはあるはずだ。それを片手ずつ、しかもあんな細い腕で・・・。どう鍛えたらこんな力が身につくっていうんだよ。

・・・ステロイドとか使って無いよな？

「ぐうう」

知萌はそのままダイニングの方へと消えて行った。被害者の二人は成す術なく低い呻き声を上げている。首絞めてる首絞めてる、危ないって。

「あゝ、お母さん、恋夏と悠も朝食できたからこっち来てね」

知萌が、何か言い忘れたことがあったかのように、ひょこつとダイニング側から顔を覗かせて言う。

あれっ？

何か今日の知萌・・・やたらと優しくないか？

てっきり、僕もあの「人間ハンガー」でダイニングに連行されると思っていたんだけど、今の知萌の様子を見ると、どうやらそういう展開ではないらしい。

「お兄ちゃん、早く行こっ」

「あ、うん」

少し動揺する僕を後目に、恋夏ちゃんはそそくさとダイニングの方へ消えて行った。

どうも合点がいかず小首を傾げていると、恵美さんが僕の肩にそっと手を添えて言った。

「相変わらず、姫心家は楽しい家族でしょ」

「本当ですね、本当にもうわけが分からないくらい愉快的家族です」
「悠君も含めて、私にとっては大切な家族なの。だからいつでも帰ってきてもいいのよ。皆、すごく喜ぶと思うしね。私も、よっちゃんも、ゆう君も、れんちゃんも、それでも勿論ともちゃんもね」

全てを包み込んでしまうような、そんな無限の優しさを持った微笑み。

「ありがとうございます、恵美さん」

僕はお礼を言って、ダイニングに向かった。恵美さんの表情に比べれば、明らかに作り物感が否めない僕の笑顔だったが、それは致し方ないこと。

僕は、それほど器用な人間ではない。

ただ単純に、照れくさかったのだ。

ダイニングに行く頃には、既に料理がテーブルに並べられ「人間ハンガー」状態だった二人と、知萌と恋夏ちゃんは席に就いていた。
「ほらほら悠、突っ立ってないで席に座る」

知萌に促されて僕、そして僕よりも少し遅れてダイニングに入ってきた恵美さんが続けて椅子に座る。それぞれ座る位置は、僕がこの家で暮らしていた当時と全く変わっていない。

時計周りに、知萌、僕、恋夏ちゃん、友一君、恵美さん、吉朗さんの順番。つまり、僕の隣は、知萌と恋夏ちゃんということになる。愛しいご主人様と、可愛い妹に囲まれているわけだから、当然悪い気はしない。

僕がこの家に来た頃にくじ引きで決めた席順だったのだが「僕、クジ運強え」ってその時は本気で思ったほどだ。

さて、姫心ファミリーが全員揃ったことだし、ここで一人一人簡単に紹介していこう。

まず、当主の吉朗さんについてだが・・・これが何と説明しているのか、一言で表現すると「変な人」である。

歳は40歳で、既に一流企業の重責を担い、現在出世街道まっしぐら。かなり名の知れている大学を首席で卒業した経歴もあり、間違ひなく優秀な人間だと思うのだが・・・どうもそうは見えない。恐らく、知萌をはじめ、姫心家の子供たちは、自分の父親を尊敬の対象として見たことは無いのではないかと思う。残念ながら、僕も吉朗さんのことを凄い人だと思ったことは無い。

やたらと親バカなところがあるし、しゃべり方も変。クラスに一人は居る、場を盛り上げることしか能が無い馬鹿といった感じである。

いや・・・馬鹿と言い切ってしまうのも失礼な話なのだが、これが一番適切な表現かと思ったので。

次は、そんな馬鹿な当主の奥さんである恵美さんについてだが、こちらも一言で表現すれば「姫心家の裏当主」と言ったところだろうか。

裏当主と言っても、別に裏で吉朗さんを操っているとか悪い意味じゃなく、姫心家をうまくまとめているという意味である。僕の知っている限り、恵美さんは「腹黒」とか「邪心」とか「暴君」などと言った言葉とは全く無縁であり、むしろそれらの言葉の全く対曲線上に位置する人物である。それに、とにかくしっかりして優しい人である。亭主があれだと、これくらいの妻が必要だというお手本の様だ。

しかも、吉朗さんと同級生とは思えないくらい容姿は若作りで奇麗である。吉朗さんとは幼馴染だったらしく、高校卒業と共に婚姻

届を出したらしい。幼馴染で高校卒業時・・・絶対無いと分かっているのだが、嫌でも知萌のことを意識してしまうのはまあ仕方が無いことだろう。結婚して4年後に知萌を出産・・・まあ妥当な線だろう。因みに、以前その当時の写真を見せてもらったことがあるのだが、今の知萌にそっくりだった。側に居ると少し緊張するのもきっとそのためで、同じ時代に存在していたら明らかにリアルドッペルゲンガーだ、というくらいそっくりだった。今現在もよく似ているのだが、その時だけは知萌は恵美さんの娘だという事実を素直に受け入れるしかなかった。

まあ、別に疑っていたわけじゃないんだけど、吉朗さんと恵美さんからあんな人間凶器が誕生するなんて、普通はね・・・。

ほんっと、ミューテーションもいいところだ。「天使」と「妖魔」を合体させて「魔神」が誕生した様な驚きである。

さあ、続きましてはこの家の長男友一君についてだ。

今年の四月から高校生という、知萌と僕とは3つ下になるわけだが、これがなかなかの苦勞人である。性格はクールで至って普通だが、このファミリーでは普通の人間ほど苦勞が待っているというのが当たり前のことなのだ。

友一君の相談話を聞くと共に、僕の話聞いてもらおうといった、よき相談相手でもある。

もし僕がいなければ、彼が僕と同じ運命を辿っていたのかもしれない。

ふっふっふっ、果たして君の体力と精神力でこの責め苦に耐えられるかな。ふっふっふ・・・はあ。

ただ、口ではなんだかんだ言っても、姉である知萌のことをよく慕っており、常に彼女のことを想っている。面倒見もよくて、妹の恋夏ちゃんと一緒に遊んでいる姿をよく目にする。いいお兄ちゃんといったところだろうか。

因みにテレビゲームが大好きで最近は巷で流行っている「モンスターバスターP&G」に熱中している。僕も少しやらせてもらった

が、白い猿にフルボッコにされてお陀仏だった。初心者に対してあんなに動きの速い奴をぶつけてくるなんて……。理不尽もいいところだと抗議すると、やっぱり無理でしたかと溜息をつかれてしまった。

・・・何故だ？

お待たせしました、続きましては可愛い妹こと、姫心家の次女、恋夏ちゃんについて紹介いたします。

現在10歳の小学四年生で、小さくて非常に可愛い。僕がこの家を出て行く時、当時7歳だった恋夏ちゃんが号泣してくれたのが非常に印象的で、3年経った今でも何等変わっていないように思える。本当の兄である友一君のことを「ゆうちゃん」と呼び、僕のことを「お兄ちゃん」と呼ぶ。これは、僕のことをよく慕ってくれていると解釈してもよいだろうし、実際側に居ると、すぐに引っ付いて甘えてくる。

滅茶苦茶可愛い。

ただ、あまりにも幼すぎるのと、知萌がいる為、恋愛対象として見ることが出来ないのは残念ではある。まあ、こんな僕に可愛い妹がいるっただけでも、それは嬉し過ぎることなのだが。

恋夏ちゃん、ずっと僕の可愛い妹でいてね……。って、ちょっと危ないか？

そして、最後になりました。今さら不要だと思いますが一応紹介しておきます。我がご主人様でありながら幼馴染の、姫心家長女、知萌であります。

ご存知の通り高校3年生で、今月末に18歳の誕生日を迎える。同年度生まれでこう言うのは何だが、現時点では僕より年下になる。まあそんなことは些細なことだけだ。

姫心家での位置付けはと言うと、恵美さんにとっては可愛い娘、恋夏ちゃんにとっては頼りになる姉と、女性陣には人気があるのだが、さっきのやり取りからも分かるように、男性陣にとっては暴君である。それも、圧倒的な武力に物を言わせ、言うことを聞かせる

かなり質が悪いものだ。ただ、当然攻撃的であるものの、普段僕にする様に、急所を殴ったり、急所を蹴ったりと言うのはどうやらないらしい。

つくづく僕は貧乏くじを引いてしまったみたいだ。いや、この場合当たりくじを引いたと言うべきだろうか。

「僕は知萌に選ばれた」と、あくまで前向きに考えよう。

一通り紹介が終わったところで話は戻る。目の前のテーブルに並べられたのは、白ご飯、味噌汁、目玉焼きと言った、日本の代表的な朝食だった。

この中で細工が一番楽に施せそうなものと言ったら・・・やはり味噌汁か。いや、案外白ご飯も油断できない。炊き立てなので、昨日の内に炊飯器をセットしたということになる。とすると、ルール上準備したのは恐らく知萌だ。一度も洗って無いとか、謎の秘薬を混ぜたとか・・・危険要素は数え切れないほどある。

僕は、何か不審な点が無いか一つ一つ確認する。

・・・すると、

「なによ悠、そんなにじろじろ見ないで早く食べたらどう」

隣から、知萌が不満そうな顔で覗き込んできた。僕は堪らず視線を反対側に逸らすと、そこでは恋夏ちゃんが「いただきます」と元気よく言って、ズズと味噌汁を啜っていた。

別にここは小学校ではないのだ。皆で一緒に「いただきます」と言わなければならぬ決まりなど無い。周りを見渡すと、恵美さんも既に朝食に手を付けていた。男性陣は・・・やはりまだ躊躇っているようだ。

恋夏ちゃんとはともかく恵美さんは平気なのだろうか？

僕は、恵美さんの様子を注視する。

・・・特に変わった様子は無い。

「はるかあ」

ぎくう

僕の肩に置かれた手に、恨みの籠った声。

当然その主は知萌。

これは、本当にやばいかもしれない。本気でそう思った。

・・・しかし。

「別に、無理して食べてくれなくていいよ。私が二食分食べればいいことだしね」

そう言うと、知萌はあからさまに不機嫌そうな顔で、すぐに僕の前の料理を下げようとする。その言葉に友一君は少し反応したが、流石にここは自重した。

何だよそれ。こんな反応は・・・俺の知ってる知萌じゃないぞ。本当にどうしちゃったって言うんだよ。

とにかく、僕は咄嗟に知萌の手を掴んで言った。

「さっきも言ったけど、折角知萌が朝食を作ってくれるんだ・・・例えばどんなに不味かろうが臭かろうが、僕は喜んで食べるから」

本当に咄嗟だったので、さっきとまるで同じことを言ってしまった。

まずい、よく考えるとこれは失言だったはず。

「そう。安心して、私の料理は超美味しいから」

そんな僕に対して、知萌もさっきと全く同じ反応を返す。

表情がすごく可愛かった。

その様子を、恵美さんはニコニコしながら嬉しそうに見つめ、吉朗さんはうんうんと何かに納得したように頷き、友一君はやれやれと呆れた表情を見せ、恋夏ちゃんはガツガツと相変わらず飯を食べていた。

「いただきます」

そんな視線に、僕は自分で言ったことが恥ずかしくなり、それを紛らわそうと、知萌が焼いた目玉焼きに急いで箸を伸ばした。

あ、醤油をかけないと。

・・・焦りすぎだ。

ん・・・あれ？

あれ、あれ？

おや、これは一体？

まさか、こんなはずは！

・・・。

「ご馳走様でした」

僕は、首を傾げる。

特に何も無かった・・・ていうか普通だった。

普通の白ご飯に、普通の目玉焼きに、普通の味噌汁だった。

「どう、超美味しかったでしょ」

知萌が隣から、それ見たことか言わんばかりに、自信たっぷりで聞いて来る。

・・・普通だった。

でも、これは知萌が作ったんだから。

「超美味しかったよ」

「当然ね」

歯を見せてニコッと笑う知萌。

驚いたな。恵美さんの言っていたことが、ここまで本当だったとは。人間誰しも苦手なことはあるけど、克服できないことは無いんだな。

知萌が作ったのは、誰でも簡単に作れるような朝食だったが、僕は感心するしかなかった。

そんな僕の様子を見てか、吉朗さんと友一君も朝食に手を付け出したようだ。おいおい、僕を毒味に使わないでくれよ。

因みに知萌はいつの間にか完食していた・・・早っ。

2章 一 掛け替えない輪、一周 一 その2

6時30分、食事を何事もなく終えた僕は心霊研究会の連中が迎えに来る時間、確か9時過ぎってことになっていたと思うけど、その時間までリビングのソファで寛ぎながらで時間をつぶすことになった。知萌と恵美さんは朝食の後片付けをしている。吉朗さんももうひと眠りしてくると2階に上がって行った。今のところ、二人とも旅行に出掛けそうな雰囲気は全くない。

「それにしても、驚きましたよ。まさか姉さんがあんな普通の料理を作るなんて・・・奇跡です」

右隣に座っていた友一君が呟く。もう「人間ハンガー」になりたくないのか声は小さ目である。

「うーん、今日のお姉ちゃんの料理は、何だかまいちだったね」左隣に座っていた恋夏ちゃんが残念そうにぼやく。ソファはもう一つあるんだから、わざわざ三人並んで座ることは無いかもしれない。でも、いかにも仲良し兄妹みたいなので、これはこれでいいものだ。

僕には本当の兄弟がいなかったので、憧れでもあった。

「っていうかさ、何だか今日の知萌優しくくない？もしかして昨日帰って来てから何かあった？」

僕は、先ほどから感じている疑問を率直に投げかける。勿論当の知萌には聞こえないように声量は下げている。

「えー、別に何も無いよ。それにお姉ちゃんはいつだってお兄ちゃんに優しいよねー」
ガクッ

派手にリアクションを取って、前のめりに倒れそうになる。

恋夏ちゃんにとっては、あの暴力行為が優しさに見えるらしい。ただ単に天然なだけだろうか。もしくは、もっと深いところまで読んでの発言なのだろうか。でも、もしそうなら・・・なるほど、

なかなか侮れない少女である。

いやまあ、僕自身知萌に殴られて優しさを感じたことなんてこれっぽっちも無いんだけどね。

それより・・・恋夏ちゃん声が大きい。知萌に聞こえる。

こんな話をしていることを知られたら、後でどんな尋問に遭うか。

「シゝシゝ・・・」

僕は、恋夏ちゃんに向かって声のボリュームを下げるようにと促す。あの人差し指を立ててやる、お馴染みのジェスチャーである。

「ありゃ、お兄ちゃん何やってるの？シゝシゝって」

恋夏ちゃんは不思議そうに首を傾げる。

「まったく、不思議なのはこっちだよ。何で分からないの。このジェスチャーって全国共通じゃなかったのか。」

「シゝシゝ・・・うゝん何だろう」

「シゝシゝって言ったら、その・・・色々あるだろ。「ガールズ」とか「レモン」とか「サバシア」とか、って、ちがゝう！」

「つまり恋夏、もう少し静かに話そうってことだよ」

「そう、その通りだ。偉いぞ友一君。」

「えゝ、なんでなんでゝ」

「僕にも被害が及ぶから」

「・・・クールだ。クールすぎるぜ友一君。」

「うゝん、分かったよゝ」

「えっ、それで納得しちゃうんだ。」

「でも、俺は本当に何も知りませんよ。今日の朝食のこともそうだけど・・・参考までに、前回の時は食べた後、トイレに直行しましたから」

「なるほどねゝ、でもこれで少しはトラウマが解消されるんじゃない？」

「いいえ、そう簡単には無理ですよ。あの時の恐怖は半端じゃなかったですから。何か川が流れていて、大鎌を持った人が手招きしてましたから」

あの時って言うのは間違いなく病院へ搬送された時のことだろう。友一君は、恐怖に怯えた形相で話す。

「それ、三途の川だね。僕も今までに何度か行ったことがあるよ。そうか、友一君も行ったことがあるのか。怖いよね、三途の川」

「お互い苦勞しますね」

「だね」

「ねえねえお兄ちゃん、三途の川ってどこ？楽しいところ、お兄ちゃんと一緒に行ってみたいな」

無邪気にはしゃぐ恋夏ちゃん。言っている内容は結構洒落にならないが、何も知らないで言っているのだから、これはとても可愛いもののだ。

あまりにも無知で可愛い恋夏ちゃん。彼女のことを、年齢よりも幼く感じてしまうのは僕だけだろうか。四月から小学五年生になるというのに、どう考えても小学校一年生ぐらいにしか見えない。見た目も思考も、行動だって……。

これも偏に「恋夏ちゃんずっと少女のままでいてくれ」と願っていた、僕の努力の賜物かもしれない……嘘、冗談、本気にしないでくれよ。

この後、朝食の片付けが終わった知萌と恵美さん、1時間後にはもうひと眠りしていた吉朗さんを加えて、くだらない話を和気あいあいと2時間少々楽しんだ。

話の内容なんて、結局のところどうでもいいのだ。

ただ楽しければそれでよかった。

この家族と一緒に居る時はいつだってそう思う。

そう思わせてくれる家族なのだ。

僕も、本当に姫心家の一員になれた様な、

いや、きっと皆がそう想ってくれているからこそ、そう思えるよ
うな、

僕にとっては不思議で、幸福で、安らぎの空間なのだ。

ピンポーン

呼び鈴が、姫心家中に響き渡る。時間は9時を少し回ったところだ。妹木達、心霊研究会の連中が迎えに来るのは9時過ぎってことになっていてらしいので、恐らくそれだろう。

「おっ、加奈子達かな」
ガシッ

知萌は、僕の右手をギュッと掴んで跳ねるように玄関へと走った。掴む力が強い。

引っ張る力が強い。

・・・痛い。

こうなってしまうと僕はされるがまま、引っ張られるがままである。それにしても、はしやぎすぎてないか知萌。

「つて、ちょっと急に手を離すなって！うわっ」

ドゴン

オーバースピードで廊下を駆け抜けた上、急にブレーキを掛けるものだから、僕は勢いのままに玄関の扉に激突した。知萌ならともかく、僕には自然界の法則に逆らうだけの力が無かったってことだ。もろに顔面から激突したので・・・痛い。

額を優しく摩りながら知萌の方に向き直ると、そこにはいつも通りの憎たらしいくらい悪い笑顔があった。間違いなく確信犯だろう。ガチャ

知萌は、そんな僕を気にとめることもなく、玄関のノブに手を伸ばし、扉を押し開く。

するとそこには、案の定心配そうな表情をしたクラスメイト、妹木加奈子が居た。

「おはよう加奈子」

知萌が明るく、元氣よく挨拶をする。当然のことだが先程までの表情は既に封印している。いつものこととは言え、つくづく器用だと思う。

「おはよう知萌。あ、それと睦月君。・・・それより、さつきすごい音したけど、なにかあったのかな」

妹木は、知萌ではなく僕の方を見ておっとり、のんびりした口調で言う。いくら天然ボケの妹木でも、今の状況を見れば、大体のことは把握できたらしい。

まあ確かに、何かが衝突したような音がして、どこかを痛そうに摩っている人物がいれば、何が起きたのかは一目瞭然ではあるが。

「妹木、突然驚かせてごめん。ちょっと勢い余って扉に衝突しただけだから。僕、体は頑丈な方だし、これくらいなんともないよ」

「そう。よかったあ。睦月君は、相変わらずのドジっ子だね。」
昨日も、ビーナス像に頭ぶつけて保健室に運ばれたって聞いたよ。心配したんだからあ」

僕がドジっ子だと言う嘘の情報は学校全体に広がっている。勿論妹木も例外ではなく、僕のことをドジっ子と信じて疑っていないようだ。

これは高校入学当時から既に広がっていたもので、始めはそれなりに否定もしていたが、今となってはもうどうでもいいことである。・・諦めました。

ドジっ子でもいいじゃん。

ドジっ子最高。

ドジっ子こそわが生き甲斐（意味不明）。

・・・まあ、ドジっ子でもないんだけどね。

「睦月君、気を付けなきゃ駄目だよ。前を見て歩くのは大切だけど、ちゃんと足元確認しなくちゃ、あ、それと信号は青になってから右見て左見て右見て、それでも車が来ない時に横断歩道を渡るんだよ、私はいつもそうやってるよ。ねっ」

さっきの心配そうな顔から一転、今度は「ねっ」と満面の笑みを浮かべる。後方から家の中に吹きぬけてくる風が、ポニーテールに結んだ鮮やかな黒髪を揺らしている。大きな瞳に整った顔立ち。あどけなさを前面に押し出した子供っぽい笑顔。

うん、間違いなく、知萌に負けず劣らずの美少女である。

まあ「順度100%の可愛さ」って点に置いては、知萌と全く正反対と言えるかもしれないが。

それにしても、横断歩道は右見て左見て右見て渡りましょうか・
・僕は小学生かつ。

つついつい心の中で突っ込みを入れたくなるのが僕の性分だ。因みに、つついつい声に出して突っ込んでしまうのは僕の悪い癖だ。

でも実際は、別に小学生扱いされていわけではない。ましてや馬鹿にされているわけでもない。これが妹木の地なのだ。

天然と言うかなんと言うか・・とにかく一風変わった奴だってことはすぐに理解できるはずだ。

そして、これこそが妹木が我がクラスでの可愛いマスコットキャラクターたる所以でもある。

「美少女で天然」ってだけで人気者になれるのは、今や高校生の常識だ。（どんな常識だよ）

知萌と言う存在がいなかったら、もしかすると僕も、彼女と付き合ってみたいと願い、想像を巡らせていたかもしれない。

「絶対にそうならない」を、完全否定するだけの魅力が妹木にはあるのだ。

まあ、当然好みによって人それぞれだとは思うけどね・・ってことは僕天然好きなのか？

・・否定はしないけどね。

「それにしても、加奈子一人なの？他のメンバーは？」

「あっちだよ」

知萌が聞くと、妹木は振り向いて姫心家を囲むコンクリート塀を指差した。

なるほど。低音だが車のエンジン音が聞こえる。つまり、メンバーはあの塀の向こうで、車に乗って待っているってことか。

知萌の方を見る。

知萌も僕の方を見たので、目が合った。

「準備オーケー？」

「うん」

僕は軽く頷き、表情を崩す。

「行つてらっしゃいともちゃん、悠君」

気がつくのと、姫心家の面々が見送りに来てくれていた。

友一君・・・また帰つて来たら僕の「武勇伝」を聞かせてあげるよ。

恋夏ちゃん・・・今度は、一緒に三途の川でもどこでも遊びに行こうね。

吉朗さん、恵美さん・・・結局、旅行に行くつて話はどうなったんでしょうか？

団欒中もずっと、今か、今かと気になっていたんですけど・・・あれっ？でも、そのことを直接聞いたのは知萌の口からだけだったっけ。

「それじゃ、いってきまうっす」

・・・たく、いつもいつも君は。

知萌の明るい声と、明るい表情を見たら・・・もうどうでもよくなった。

「いってらっしゃい」「悠ちゃん」「悠君」「悠さん」「お兄ちゃん」

」

吉朗さん、恵美さん、友一君、恋夏ちゃんの声が重なった。

大好きな人達に・・・大切な家族に見送られて。

「うん、行つてきます」

こんな当たり前の光景を、こんな当たり前の出来事が・・・

「それじゃ行こう、悠」

「そだね」

この世に存在する、どんな幸せよりも最上級の幸せに思えるのは僕だけかな？

僕は、他の誰に問いかけるでもなく、そっと自分に問いかけた。

3章 一 舞台上上がる生贄、九人 一 その1

「睦月君って本当に可愛いよね」

車に乗ってしばらく、初めて振られた話題は、僕として非常に不本意な話だった。

参加者が知萌と僕を含めて九人だったこともあり、男子組と女子組を分けて、車二台に分乗することになっていた。本来なら、僕も男子組の車に乗るはずだったのだが、案の定と言うかなんと言うか、あっけなく女子組の車に乗ることとなった。

理由としては、知萌がそれを望んだことが挙げられるが、メンバーがそのことをあっけなく了承してくれた背景には、周りから見た僕の印象が「女の子の様だ」というのもあったのかもしれない。今し方振られた話題のこともあるので、僕にはどうもそう思えて仕方が無い。

もう一度言っておこう・・・僕は男だ！

参加者は男子五人、女子四人となっているので、今この車には五人の男女が乗っていることになる。当然のことながら、男子は僕一人である。しかも、どういうわけか僕は後部座席の真ん中に座っている。右手側に知萌、左手側に妹木・・・体は密着している。

言い変えてみると、所謂「ハーレム状態」なわけだ。

しかし、例えどんなに可愛い女の子が居たとしても、僕は知萌一筋なので感動は薄い。知萌が側に居ることは、いつもと何も変わらない。

「っていうかさ、一時期睦月君が本当は女子だって噂が流れてたじゃん・・・それってマジな噂なわけ？」

僕の同級生にして、車の所有者及びドライバーの、保永未来やすながみらいが問いかけてくる。同じクラスになったことは無いが、一応同級生と言うことなので顔ぐらいは知っていた。名前は・・・車に乗ってすぐに軽く自己紹介をしたので覚えた。

因みに、保永と、僕にこの話題を振ってきた人物は同一人物である。

・・・全く、運転手の癖によく喋る。免許取り立てなのだから、もっと運転に集中して欲しいものである。

「それは真正正銘ただの噂だと思うけど」

「うーんそうかい。残念残念」

僕が紛れもない事実を述べると、保永はつまらなさそうに、茶色に染めた長髪を左手で撫でまわした。・・・おいおい、片手運転も初心者には危ないんじゃないのか？

「でも、睦月先輩って本当に可愛いと思いますよ。雛子のクラスでも、先輩のこと女の子だと思って一目惚れした男子がたくさんいましたから」

助手席に座っている、自分のことを雛子と呼ぶ少女から、僕の憂鬱度を更にアップさせる言葉が飛んできた。

彼女の名前は若杜雛子^{わかもちひなこ}。心霊研究会唯一の後輩であり二年生。つまり、僕等が居なくなる四月には、心霊研究会は彼女一人になってしまうのだ。元々怪しいし、現在の三年生がグループになって立ち上げた部だったので、こうなるのも当然と言えば当然だ。心霊研究会の存亡は彼女の手腕・・・新入部員集めに掛かっているのだ。

ま、僕にとっては至ってどうでもいい話ではあるが。

「っていうかさ、見た目で僕の性別を判断するのなら、服装を見て欲しんだけど。どうして男子の制服を着ている僕のことを女子に間違えるか、正直少し理解に苦しむんだけど」

「それだけ睦月先輩が可愛いってことですよ。セーラー服とかを着たら絶対似合うと思いますよ」

シートベルトを締めているため、助手席から上半身を捻ってニコニコと僕の方を見る雛子ちゃん。ツインテールに結んだ髪にパチツとした大きな目。表情や仕草から、年齢不相応の幼さが感じられる。所謂ロリっ子と言うやつである。よく思い出してみると、同じクラスのロリコン野郎の「学園ロリっ子リスト」に、雛子ちゃんの名前

が明記されていた気がする。確か「妹にしてえ〜」とか危ないことを叫んでいたっけ。

しかし、その点で言えば、僕には恋夏ちゃんという可愛い妹が居るので既に間に合っている。恋夏ちゃんは年齢も見た目も純正ロリ百パーセントなので、あいつがこのことを知ったら、机に噛みつきながら羨ましがるだろう。

「雛子ちゃん、セーラー服はやめてよ。僕にそんな趣味は無いって」話をするのも初めてなのに「雛子ちゃん」なんて呼ぶのは馴れ馴れしいようだが、本人が名前にちゃんを付けて呼んで欲しいと言ったのだから仕方が無い。

どうやら彼女は、自分のキャラをよく理解して、それを生かそうとしているようだ。

別に悪いことじゃない・・・むしろ僕も彼女を見習うべきなのだろうか。

男をやめて女の子に・・・って、いやいや、何度も言うようだが僕は男だ！

「ぶう〜、残念です、睦月先輩は本来付いてちゃいけないものが付いて生まれてきちゃったんです〜」

「!？」

・・・。

「保永さん、雛ちゃん。悠も困ってるし、もうこんな話は止めようよ。それより、心霊研究会のことについて教えてよ。私は加奈子から聞いて大体知っているけど、悠はほとんど何も知らないんだよ」

この話に終止符を打ったのは僕の隣に座っていた知萌だった。口調が家に居た時とは別人だが、それは当然表向きの顔、つまりライトサイドの知萌であるからで、これは僕にとっても、他の皆にとっても、ごく自然な知萌の姿である。

「そ、そうだよお〜・・・男の子に可愛いなんて言っちゃダメだよお〜。それに私、知萌ちゃんに聞いて知ってるんだよお〜。睦月君、そう言うこと言われるのあんまり好きじゃないんだって」

「ちょ、加奈子」

へえ、知萌が妹木に僕のことについてそんな風に話してくれているなんて。

・・・少し意外だった。

実際、僕自身も女子っぽい男子として見られることを快く思っていないので、もし知萌がそんな僕の気持ちに汲んで、妹木にそう言うってくれているのなら、これは素直に喜んでいいのであろう。

それにしても、妹木も妹木だ・・・こう言うことは、本人が居る前ではあまり話す事じゃない。

妹木を止めようとしたところを見ると、もしかしたら知萌は口止めをしていたのかもしれない。それでもあっさりポロリしてしまうっていうのは・・・これもキャラクターと言っているのだろうか？素直と言うかなんというか、妹木自身全く悪気が無いのだから、憎むに憎めない。それに、今回に至っては、知萌の気持ちが少し分かったので「妹木ナイスポロリ」ってところである。

「それは悪かった、ごめんごめん睦月君。許してね」

保永が後ろ向きに手を振りながら謝る。多少おどけた様子で、とてもじゃないが本気で悪かったと言う意思が伝わってこない・・・ってか、また片手運転！お詫びはいいからハンドルを両手で握れって。

「睦月先輩ごめんなしやい・・・そうですよね、雛子失礼でしたよね・・・ごめんなしやい」

雛子ちゃんは素直に謝った。

「別にそんな謝ることじゃないよ。僕自身全然怒ってないしね」

確かに女子扱いをされるのは好きじゃないけど・・・と付け足そうと思ったが、十分に反省している雛子ちゃんを見て、言う必要が無いと思うとどまった。

保永は相変わらずだったが、彼女には運転の方に集中していただきたい。

「それよりさ妹木、雛子ちゃん。知萌の言ったように、心霊研究会

の話聞かせてよ。これまでの活動内容とか・・・その、実績とかさ」

話してくれるのが妹木と雛子ちゃんなら、間違ってもそんなに怖くないと判断した。特に、妹木とかだったら、怖い話をしても愉快的話に聞こえてきそうである。見る分には平等に怖い、話す分に至っては、話をする相手によって恐怖が十倍にも十分の十倍にも変化する。

某靈感タレントIさんの様な人を怖がらせる話術を、妹木や雛子ちゃんが持っているとはとても考えられない。

「はい、そう言うことなら雛子に任せてくださーい」

雛子ちゃんが元氣よく挙手する。

「えーと、そうですねー、それじゃ、まずは最近の話題から」「最近の？」

「そうですね。我が部の・・・っていうか雛子の最近の活動内容。まず一つ目。「学園七不思議」の調査」

・・・七不思議。やっぱりここは外せないところなんだろうな。

「ふーん、うちの学校にもあったんだ七不思議」

「そうですねー、あったんです。ずっと無いものだと思われていたんですけど、最近になって雛子が見つけたんです。えっへん」

「一人で色々探してー、見つけたんだよねー、雛ちゃん凄いなー」

「てへへ、妹木先輩に褒められると雛子嬉しいでしゅ」

雛子ちゃんが、てへへと照れ笑いをする。こうして見ると、この二人はなかなかいいコンビかもしれない。

「それで、具体的に七不思議ってどんなのがあるの？」

「そうですねー、まず一つ目の不思議ですが、こわいですよー、キヤーですよー。ダカダカダカダカ・・・」

雛子ちゃんがドラムロールを口で表現する。

「ジャジャーン。」「恐怖、首吊りツリー」

「えっ？首吊りツリー？・・・ツリーって「木」のこと？」

「流石睦月先輩。鋭いです」

「ど、どうも」

「睦月先輩も知っているとと思うんですけど、焼却炉の裏に一本の大きな桜の木がありますよね」

「うーん、確かにあったような気がするよ」

「はい。実はその桜の木なんですけど、恐ろしいいわく付きなんです」「生徒が首を吊って自殺したとか？」

「はにゃっ！何で分かつちゃうんでしゅか？」

「いや、だって「首吊りツリー」って」

「・・・ま、まあそうなんですけど、実はその桜の木には、心の弱った生徒を自殺に誘う能力があるらしいのです」

「自殺に誘う？」

「そうです。これは去年卒業した先輩から聞いた話なんですけど、先輩のクラスにはいじめられっ子の男子生徒が居たそうです。その男子生徒は、来る日も来る日もからかわれ、千切った消しゴムを投げ付けられ、ゴミを投げ付けられ、気持ちが悪いと罵られ、上履きを隠され・・・度重なるいじめを受けて、本気で自殺することを考えたそうなんです。もう生きていても辛いだけだから死んでしまおうと」

「随分と姑息ないじめだね」

「雛子もこう言うのは大嫌いです。それで自殺を決意した夜にそれは起きたのです」

「いったい何が？」

「夜中にふと目を覚ますと、なんとあの大きな桜の木の前に立っていたのでしゅ。しかも、枝からは首吊用のロープが垂らされていて、体の透けた女生徒がおいでおいでって、桜の木の隣で手招きしてたんでしゅ」

「・・・」

「男子生徒は、まるで催眠術にでも掛かったかのように、女生徒の方へ一歩ずつ歩み寄りました・・・そして」

「・・・そして？」

「男子生徒は、その女生徒の幽霊さんの前、垂れ下がったロープの下まで来て気付いたんでしゅ」

「な、何に？」

「ロープの輪っかの位置が高すぎて届かないってことに」

「はあ？」

「結局その男子生徒は自殺出来ずに、家に帰ってもう一度眠りました。それ以降、自殺したいと思ったことは一度も無かったそうでしゅ・・・おしまい」

・・・なんだよそれ。

「それがオチなの？」

「まあそうと言われればそうですけど、実はこの話にはとってもいい秘話があるんです」

「男子生徒の自殺衝動が解消したことと関係があるのかな？」

「はい。実は、次の日その男子生徒のクラスに転校生が入ってきました。そして、その転校生が彼にとっての初めての友達になったんです。きっと、それが心の支えになったんだと思います」

「で、その転校生って言うのが、雛子ちゃんがこの話を直接聞いた先輩ってわけだね」

「はにゃっ！何でもまたまた分かっちゃうんでしゅか？」

「話の流れで何となく予想がつくと思うんだけど」

「流石です睦月先輩。・・・それで雛子考えたんです。あの桜には二つの想いが交差していたんじゃないのかなって」

「二つの想い」

「一つ目は、勿論この噂の発端となった自殺に誘うということ。枝に首吊用のロープが垂らしてあることから考えてもこれは確実です。これには、いじめを苦にして首吊り自殺した生徒の怨念だとか、絞殺されて桜の木の下に埋められた人の怨念だとか、いろんな説があります。本当のところは雛子にも分かりませんし、それはこれから調査していくことです」

へえ、心霊研究会って結構それっぽい活動をしているんだな。

名前からして怪しかったので、もっとやらんぽらんなことばかりしているものと勝手に思い込んでいた。・・・まあ、怪しい活動内容には変わりないけど。

「そして、二つ目の想い。それは、先輩の友達の男子生徒が見たっていう女生徒の幽霊さん」

「手招きしてたっていう？」

「そうです。そしてその女生徒は、自殺に誘おうとしていた怨念とは全く別のものだったんだと雛子は考えたんです。・・・きつと、いじめに苦しんでいた先輩の友達に対して「自殺なんて止めて、お友達になろう」って呼びかけてくれてたんじゃないかって」

「どうして？」

「調べて分かったんです。以前あの大きな桜の木が大好きだった女生徒がいたことが。その女生徒は明るくて誰からも好かれ、いつも友達に囲まれていた。・・・一人で寂しそうにしている生徒を見かけては、手を差し伸べて「お友達になろう」って笑顔で話しかける。・・・とっても優しい女の子だったの。だから・・・突然交通事故で亡くなった彼女の葬儀には、かつて例が無いほどたくさんの友達が参列して、皆涙を流してお別れを悲しんだんだって」

「つまり、雛子ちゃんが考えているのは」

「はい。先輩の友達が見た女生徒の幽霊さんって言うのは彼女なんじゃないかなって・・・それで、先輩と言う友達を、先輩の友達に与えてくれたんじゃないかなって。・・・自殺なんかしちゃダメだよって」

「でも、雛子ちゃんの前輩が転校してきたのってただの偶然じゃ」

「はい、そうかもしれません。でも、雛子にはどうしても納得のいかないことが一つあるんです。あの桜の木が確かに先輩の友達を自殺に誘ったんだとしたら、いったいどうやって自殺させるつもりだったんでしょう？」

「ロープの輪っかの位置が高すぎて届かなかったって言う件だね」

「はい。普通首吊り自殺をするのなら、何か台の様な物に乗って首

にロープを掛けるっているのが一般的で・・・確かに木に登って首にロープを掛けることも出来ますが、先輩の友達にそれが出来たとは限りません。現に、これまであの桜の木で自殺した生徒の側には、決まって台の様な物があつたそうです」

ここまで聞いて、僕には、雛子ちゃんが何を言わんとしているのかが大体分かった。

ロリっ子だからって甘く見ていた・・・なかなかの調査能力と想像力だ。

「つまり、その女生徒の幽霊が首吊りに必要な台をあらかじめ・・・」

「はい。雛子はそう考えています」

幽霊は幽体、首吊り自殺者の側に転がっていた台は明らかに実体。幽体と実体が触れられないことは世の中の常識である。果たして、幽霊である女生徒が、椅子なり何なりという台を移動させることができるのか？

いや、この考えは飛んだお門違いだ。理解し難い存在を、実際に会ったこともないのに、他人から聞いた話や空想で定義するのは危険極まりない。そもそも、その考えが成立してしまうのなら、幽体すらない桜の木に宿った怨念が、桜の木にロープを掛け、台を下に運んでくると言う前提条件まで、根底から覆されてしまう。

あるいは、ポルターガイスト現象だというのか。確かにそれなら、霊が直接接触られない物を移動させることができる。しかし、もしそんなことが起きているのなら、まずこっちの方が先に噂になってもいいようなものだが。

地球の支配者である人間だが、まだまだ未知の分野はいくらでもあると言うことだ。

そうになると、雛子ちゃんの考えはそれなりに分からなくもない。最低でも、無数に存在する解答の内の、立派な一つの解答として認められるものではある。もし作り話だとしても中々よく出来ているし、幽霊の存在を恐れている僕としても、別にその通りでもいいか

と思ってしまう。

僕自身幽霊の存在を信じているのかって？

・・・半分半分だと思う。さっきも言ったように、人類でも完全に解明できていないことはいくらでもある。分かっているに百パーセント「イエス」「ノー」と答えるのは僕の性分ではない。

百二十パーセント知萌のことが大切だと言い切れるのとはわけが違うのだ。

「でも雛子ちゃん、一つだけ疑問があるんだけど」

「え？何でしゅか？」

「これまでも何度かあの桜の木で首吊り自殺した生徒がいた、みたいな言い方をしていたよね。もし本当に桜の木が自殺に誘い、女生徒がそれを止めて救おうとしていたのだったら・・・どうして、その先輩の友達みたいに皆助からなかったの？雛子ちゃんの言うように、その女生徒が本当に心優しいくて、誰からも愛されるような女の子だったとしたら、例外なく皆を助けようとするんじゃない？」

「はにゃっ！やっぱり鋭過ぎましゅよ睦月先輩」

はにゃっ！と吃驚した顔をする・・・どうやらこれは雛子ちゃんの口癖のようだ。丹雫先生のにやははみたいなものだろう。

「でも、それは違いますよ睦月先輩」

それでも、雛子ちゃんは全く動じる素振りもなく、自信満々に軽く笑みを浮かべて言う。

「だって、桜の木で自殺者が多発していたのは、全てその女生徒が交通事故で亡くなる前ですから。つまり、女生徒が亡くなったのは割と最近なんです。正確には今から6年前のことです」

「なるほどね・・・つまり、ここ6年は特に何も無かったってことか・・・確かに、入学して3年になるけどそう言う噂は聞かないもんな」

「そう言うことでしゅ・・・詳しいことについてはまだまだこれから調査検証していく予定です」

そう言い終えると、雛子ちゃんはさも自慢げにえっへんという表

情を作った。確か妹木は、七不思議については雛子ちゃんが一人で探し出したって言ってたけど、もしこれだけの調査を一人で行ったのなら、確かに十分凄いことではある。

やっぱりこのロリっ子は侮れない。

でも、それ以上に驚きなのは、あまり期待をしていなかった心靈研究会の話・・・雛子ちゃんの話が面白かったと言うことである。

七不思議と言うくらいなので後六つ、これなら案外期待できそうだ。

「で、七不思議の二つ目は？」

「はにゃっ！・・・えーと・・・そうですねー」

また随分と焦らすものだ、この後は恒例のドラムロールか。

「実はまだ決まっていなかったりしましゅ」

「えっ？」

えーと・・・つまり。

「これからもっと調査して、不思議が見つかり次第七不思議に加えていくんだよねー」

横でじつと聞いていた妹木が事実を暴露する。・・・ってことは、

「一不思議ってこと・・・むしろただの不思議？」

「はにゃっ！相変わらず睦月先輩の突っ込みは厳しいでしゅよー」

雛子頑張って、卒業までに七不思議を完成させるつもりですから」

つまり、七不思議とは元々あるものではなくて、これから見つけて作っていくと・・・うんっ、それでも間違いなく七つ揃えば七不思議だ。僕はもうすぐ卒業するわけだから、その完成を見ることは出来ないだろうけど、こうやって雛子ちゃんと関わったのも何かの縁・・・応援するよ。

「頑張ってるね」

「はにゃにゃっ！あ、ありがとうございます。睦月先輩に応援していただけるなんて、雛子本当にうれしいでしゅ」

雛子ちゃんは明らかに声のトーンを上げて、照れながら笑う。そんな大袈裟な。

どう考えても・・・オーバーリアクションだ。

でも、こうして見るとやっぱり雛子ちゃんも可愛い女の子だと実感する。これだったら妹が二人いてもいいかも知れない……。

「それじゃ、七不思議の話は一旦終わりにして、次は、そうですね・今、話題になっているあの話がいいですね。妹木先輩が話しますか？」

「えー、私はいいよー。あんまり詳しくないしー。未来ちゃんお願いー」

「っておい、どうしてそこで保永に話を振る？普通なら雛子ちゃんに返すところだろ。」

「ごめん妹木、この辺り車多くてさ……気を抜くとぶつけて愛車が凹んじゃうから雛子お願い」

僕達よりも車の方が心配なのかよ。でも、まあ何にせよ運転に集中しているのはいいことだ。

「了々解々でっす保永先輩」

雛子ちゃんが元気よく返事をする。どうやら彼女は饒舌のようだ。あわよくば、車に乗っている間ずっと、いや起きている間中、はたまた寝てる間もずっと話をしていたい……恐らくそう言うタイプなのだろう。

因みに、知萌は世間ではどっちかと言うとあまり喋らない方で通っている。現に、今さっきの雛子ちゃんの話中には一度も口をはさまなかった。

以前に妹木から聞いて知っていた話だったからかもしれないが、ライトサイドとダークサイドの知萌では何から何まで違ってくるのだ。

知萌はそんな難しいことを平然とこなすが、以前は僕の方が対応に困ったほどだった。

「ニュースでもちょこっとだけ取り上げられてたので、もしかしたら先輩も知っているかもしれないけど一週間くらい前から、他校の男子高校生が一人行方不明になっているんです」

他校の生徒が行方不明……僕は割とニュースはチェックする方

なので聞いたことがあった。高校もうちと近いので、かなり印象に残っている。

「うん、それなら知っているよ。確か、鍛正治って名前だったっけ」
「そうでしゅ、流石睦月先輩。で、その鍛さんって実は保永先輩の中学生時代の同級生なんです・・・ですよね」

「えー、まあ一応そうだけだし、高校に入ってから一度も会ってないし、あいつが今どこで何をしているかなんて全く知らないけどね」
「とまあ、少なからず繋がりがると言うことで調べてみることにしたんですよ」

「あの・・・これって霊とか関係ないよね」

「はにゃっ！・・・ま、まあ最初はほとんど興味本位で調査していたんですけど。調べている内に少し妙なことが分かったんです」

「ん、妙なこと？」

「はい。その鍛さん、行方不明になる数日前から、少し様子がおかしかったそうなんです。分かりやすく言うと、別人の様になっちゃってしまっただけなんです。これって絶対怪しいですよね」

「いや・・・割とそう言うこともあるよ思うけど。二重人格とか、二面性とか言うしね」

僕は、すぐ右手側に座っている女の子の様子をちらちら確認しながら言った。

「はい。確かに睦月先輩の言っていることにも一理あるんですけど、興味深いのはここからなんですよ。・・・実は、彼がおかしくなる直前に「鍛さんが二人存在する」って言う噂が学校中に広まっていたらしいんです」

「ん、何それ？」

「雛子調べてみたんですけど、その噂の発端となったことについては結局分からず仕舞いでした。・・・でも、雛子はここから二つの可能性を見出していましたのでしゅ」

雛子ちゃんは、声のボリュームを一段階上げて言う。

先ほどと同じく、雛子ちゃんが何が言いたいのかが大体分かって

きた。ここで口を挟んでも特に問題は無いのだが、今度はあえて雛子ちゃんの顔を立たせてあげることしよう。

「もしかしたら、そのおかしくなった鍛さんは、すり替わったもう一人の鍛さんだったんじゃないかって」

やっぱりそうきたか。

とてもそうは見えないけど・・・ミステリーの読み過ぎだ。

「もし、もしでしゅよ。鍛さんにそっくりの人物がいたとしたら、入れ替わることによって失踪した日時を狂わせることが出来るんでしゅ。仮に、鍛さんが何らかの事件に巻き込まれているんだとしたら、もうこれだけで警察の捜査を攪乱出来るんでしゅ・・・巧妙でしゅ」

「うーん、まあ確かに雛子ちゃんの言う通りかもしれないけど、僕にはちよつと無理があるような気がするんだ。一卵性双生児って言うのならまだしも、赤の他人と入れ替わるって言うのはかなり難しいよ。この場合、その鍛さんが二人存在するって言うのはただの噂か、たまたま似ている人がいたと判断するのが一般的だし、少しおかしくなったって言うのは、ただ単にマンガとかアニメの影響を受けただけってことが考えられるよね」

「はにゃっ！やっぱり睦月先輩はキツイです・・・でも、雛子は挫けません。もう一つとっておきの説があるんですよ」

雛子ちゃんが、こっちこそが本命なのだと言わんばかりに意気込む。なるほど、初めに牽制を入れるとはやってくれる。

「ズバリ！ドッペルゲンガー説！」

「・・・」

・・・あの、まだ説明は受けていないんだけど、さっきより胡散臭い説に思えるのは僕だけでしょうか。

「これは凄いですよ。実は、もう一人の鍛さんって言うのはドッペルゲンガーだったんです。そして本物の鍛さんは偶然にもこのドッペルゲンガーに会ってしまったんでしゅ。ドッペルゲンガーに会ってしまったと死期が近いと言うことを鍛さんも知っていた。だから、

鍛さんは自暴自棄になっておかしくなった。こう考えると、全てのピースが一つにはまるんでしゅ。雛子の一世一代の大推理でしゅよ」

なんじゃそりゃ。

面白い。雛子ちゃんは本当に面白い女の子だと思う。・・・でも、僕自身、中々ピースがはまらなくて困っているんだけど・・・雛子ちゃんはどんな裏技、もといテクニクを使ってパズルを完成させたのか、できれば教えてほしいな。

「つまり、雛子ちゃんはその鍛さんが行方不明になったのは、自暴自棄になってどこかでひっそりと・・・」

「うーん、ドッペルゲンガーの魔力で急に消滅したっていう可能性も捨ててはいけませんよ」

あつ、そうですか。

「でもさ、ドッペルゲンガーの存在って幽霊の存在よりも嘘っぽいと僕は思うんだけど・・・まあ確かに、これまでも世界中でいくつか目撃例は挙げられているみたいだけど、実際それが本当かどうかも分からないし。後、鍛さんが死んじゃったことを前提で話が進んでいるんだけど、昔の同級生の保永さんがいる前で、少し不謹慎だよ」

「はにゃっ！」

「あゝ、私ならいいよ。別にそれほど親しかったわけじゃないし・・・それに、三年も会ってなければ、もうただの他人だし。まあ行方不明って大抵死んでるっしょ」

運転中の保永が呆気なく言いのけた。

・・・冷たい。

でも、僕も中学時代のクラスメイトの名前とかあまり覚えてないから、まあそんなものかな・・・思い出すのは、いつだって知萌のことばかりだ。

「はにゃにゃにゃー！今度の話には睦月先輩がやけに否定的でしゅ。悲しいでしゅ」

「ちょ、ちょっと」

雛子ちゃんがマジで瞳に涙を溜め始める。彼女は泣き虫キャラも兼ねているのか？

存在するかどうかは不確かだが、彼女の兄貴はさぞ大変なことだろう。

でもまあ、手の掛かる妹ほど可愛いって言うからな・・・俺の妹になったら可愛がってあげるよ。

「いや別に否定的って言うか、そう言うわけじゃないよ。七不思議の話もそうだけど、雛子ちゃんの話は面白いよ。発想も奇抜だし、中々鋭いと思う」

「ほ、本当でしゅか」

「うん。僕は性質上嘘がつけない人間なんだ。だから百パーセント信じていいと思うよ」

「・・・はい。ありがとうございませしゅ、睦月先輩」

そう言うと、雛子ちゃんは溜めた涙を手でゴシゴシと拭って、パアッと太陽の様な明るい笑顔を作った。単純だけど、やっぱり素直なのは雛子ちゃんのいいところだろう。

いやはや、ロリ美少女に「睦月先輩」とか呼ばれるのは、もしかして凄く美味しいシチュエーションなのではないかと本気で思ってしまった瞬間である。

雛子ちゃんは妹から後輩の女の子にクラスチェンジだ。

「でも、嘘がつけないって・・・妹木先輩見たいですね」

ついノリで口から出てしまった言葉を雛子ちゃんは本気にしてしまったようである。

「ほえ、わたし・・・そ、それは、嘘は駄目だよ」

雛子ちゃん曰く正直者の妹木は、手を胸の前で交差させあたふたしていた。

うん、妹木はどう見ても嘘がつけなさそうだ。
というか、嘘をつかなさそうだ。

「でも、心霊研究会って結構幅広い活動をしているんだね。僕はて

つきり、もつと心霊現象ゝって感じの怪しいことばかりやっているのかと思ったよ」

「睦月先輩。意味分かんないですよ」

「ほら、例えばよく聞く交霊術で、霊と交信したりとか・・・」

「ええ、雛子たちはそんな危ないことしないでですよ。部員のメンバーに専門家とか霊能力者がいるわけでもないですし。それに交霊術って結構危険なんです。割と皆が遊び半分でやっているコックリさんだって、専門知識なしでやっちゃうと本当は危ないんです」

「へえ、そうなんだ」

ここで、しばらくの間運転に集中していた保永が口を開いた。

「まあ、確かにうちの部活名は「心霊研究会」ってことになっていくけど、別にその活動研究内容は心霊現象に限った事じゃないんだ。世間が怖いと思うことについて追求するって言うのが当初の目的なわけで、発足前は「オカルト同好会」とか「ミステリー研究会」とか「恐怖同好会」とか色々部活名で迷ったものだよ」

「へーそう言うことだったんだ。つまり、活動内容としては、殺人事件の犯人像をプロファイリングしたり、宇宙人と交信を試みたりしても全然OKってことか」

「ま、極端に言えば、そう言うことだね。心霊研究会にしたのは、ただ単に、考えていた部活名の中で一番響きがカッコよかったってだけ」

何といい加減な・・・いや、自由というべきなのか。

ガタンッ

「はにゃっ！」

突然、車が大きく揺れた。はにゃっ！と叫んだのは当然雛子ちゃんである。

「ごめんごめん、よそ見してたら一瞬歩道に乗り上げた。・・・でもこれだったら車体は傷付かない。ひと安心」

っていうか、保永は運転に集中してくれ。それと、車の心配よ

りも皆の心配をしる。勿論、今もう少しではねそうになったお婆ちゃんのこともだ。

ひき逃げ高校生グループの一味とかで、新聞に名前が載るなんて僕は絶対にごめんだぞ。

「話は変わるけどさ、雛子ちゃんはこれから向かっている魔咎岳村についてどれくらい知ってるの？・・・あ、いや僕なりに昨日調べてきたつもりだけど、どうして合宿で行くことになったかという経緯も含めて聞いておきたいなって」

インターネット検索でも、ほとんど引っ掛からないマイナーな心靈スポットを、何故わざわざ合宿の場所にしたのか。昨日から少し疑問に思っていたのだ。

「うーんそれは雛子にはよく分らないですね。この合宿の名目は、間違いなく先輩達の卒業合宿ってことになっているんですけど・・・雛子はまだ二年生だからでしょうか？知らないうちに決まっちゃってました」

「あー、いやいや別に二年だからとかそう言うことじゃないんだ。ほら確か、雛子が追試受けていた日があったじゃん、その日に決定したんだ。こう言うのは全員が揃う時に決めた方が、とは思ったんだけど、まあ、準備とか色々ありそうだったからさ、仕方ないじゃん」

「へえー、そうだったんですか。雛子は、いわく付きの場所ならどこでもOKなので全然問題無いですけどね。それに、魔咎岳村には行ってみたい場所があったんです。今から楽しみで雛子おどっちゃんいますよー」

いや、別に踊らんでいいから。

「行ってみたい場所ってことは・・・部内では結構有名だったりするの、魔咎岳村って」

「はい、そうですねー。世間ではほとんど知られていないマイナーな話みたいですけど、うちの部では一年くらい前からだったですか・・・結構話題にも出てきますよー」

「そうそう、ずっと合宿で行きたいって話はあったんだけど、今回運転免許をゲットして遂に念願叶ったところかな。まっ、あたしは別にそんなことは無かったんだけど、男共がね」

ふくん、そういうことか。

後は、どうして部活内で魔咎岳村が有名になったかってことだが・
・そこは別に聞かなくてもいいか。

「次は合宿の内容について聞かせてくれないかな」

「えっ、何も聞かずに参加したんですか？」

「う・・・うん。まあ知萌に誘われてね」

「はあ〜ん。睦月君は姫心さんが行くところなら、何所へだってついて行くって感じだね。」「知萌、例え幽霊が襲ってきても僕が守ってやる」ってか。ふふふ、かっこいいねえ」

ここぞとばかりに保永が茶化してくる。

「知萌は僕が守る」か・・・現状を考えると何年先になるやら、何十年先になるやら、もしかしたら一生ないかもしれない。

「ごめんね悠。私は加奈子から聞いて大体知ってるんだけど・・・その、これから話そうとしたときに、悠頭打っちゃったから。あ、それでも私、悠が目覚めますまで待とうと思ったんだよ。でも、丹雫先生がもう悠は大丈夫だからって、遅くなるかもしれないって。だから、仕方なく帰ることに・・・ごめんね」

知萌は本当に申し訳なさそうに言う。ハリウッド女優顔負けの演技力である。

・・・それにしても、丹雫先生まで利用するとはけしからんご主人様だ。

「え〜っと、これから私たちが参加するのは」

遅ればせながらと言わんばかりに知萌が説明を開始する。

説明を聞いてから参加不参加を決めるのではなく、参加が強制的に決まってから説明を聞くのは、僕にとってはもう既に当たり前の流れである。

言うまでもないが、今更その流れに逆らおうという気など毛頭な

い。

「とりあえず、着いたらまず始めに、それぞれに分かれて探索・調査するんだよね、私と悠は、部員じゃないから加奈子と一緒に回る事になってるんだよ」

「雛子たちは、それぞれ個別にエリアを回ることになってるんですよ」

つまり、妹木以外の部員は一人で村を調査することになるのか。何にせよよかった。いくら昼間とは言え廃村を一人で歩き回るのはやっぱり怖い。

「因みに雛子の担当エリアは廃校になっているんですよ」

僕は昨日、あるホームページで見た魔咎岳村の簡易地図を思い出した。

記憶力は悪い方じゃない・・・完全にとは言いが、大まかな村の地図が僕の頭の中に思い浮かんだ。

廃校・・・廃校って言うところか。

「村で唯一の学校だね。場所は村のやや北側だったけ」

「えっ、はいその通りです。睦月先輩すごいです、昨日調べてきたって本当だったんですね」

「まあね。でも、学校っていったら部員にとってはそれほど魅力的なスポットじゃないんじゃない。だって、話によると学校周辺で殺害されたのは宿直で残っていた先生一人だけだったって聞くし・・・。それだったらたくさんの人が殺害されたであろう東の居住地区とか、殺人鬼が自殺したって言う村の中心にある村長宅とか、殺人鬼が犯行に備えてしばらく潜伏していたと言う西の神社とか、もしくは・・・」

「はにやっ！先輩何気に詳しく過ぎますよ」

はにやっ！と吃驚する雛子ちゃん。この程度の情報なら、どのホームページでも簡単に調べることが出来た。ただ、これらを裏付ける根拠や証拠は一切無かったのだが。

何度も言うように、僕はこんな事件があっただなんてまるっきり

信じていない。

「雛子は、別に幽霊さんに会いたいわけじゃないんです。それは、会えればいいとは思っています。結局のところ雛子は一般ピープルなので、会ったところで幽霊さんを見ることができません。そんなのつまらないです。それだったら、今雛子は学園七不思議の調査をしてるのですから、殺人事件のあった廃校っていうものを調査していた方が楽しいです。何かインスピレーションがわいてきそうですしね」

成程、流石卒業までにと六つの不思議を掘り出そうとしている雛子ちゃんだ。この合宿にかける本気度が窺える。

強制的に連れて来られた僕とは、全てが根本的に違うというわけか。

かと言って、部外者の僕も決して観光気分、という気持ちなれないのは、残念で仕方がないのだけれど。

「それで、最終的には合宿が終わった後にレポートにして提出することになってるんだって。あ、私と悠は部員じゃないから気にしなくてもいいよ」

と、知萌が最後に付け足した。

「で、それが大体予定では夕方5時頃まで。その後7時から、合宿夜の部だって」

夜の部う？

いわく付きの廃村。当然人工の灯りなど存在しないだろう。そんな真っ暗な場所で肝試しでもしようって言うのか？

しかも一人で、なんてことになったら・・・。

それはマジで・・・洒落にならない。

ゴクリッ

生唾を飲み込む。そして、ゆっくりと知萌の方を見る。

「悠、安心して。夜の部って言ってもそんなに怖いイベントじゃないから。悠が怖がりだって私は知ってるから。そんなイベントがあるなら悠を誘ったりしないし、私だって参加しないよ」

知萌、それなら僕をいわく付きの廃村合宿に強制参加させるのもやめてくれ。」

「へえ、睦月君怖いのが苦手なんだ。やっぱり可愛いね。まるで女……いや失敬。おっ！うわっ！あつぶねえ。もう少して対向車とぶつかる場所だったよ」

保永は頼むから運転に集中してくれ。」

「保永先輩っ！雛子お薦めのユーロビートのCDを流しましょうか」
「おっ、いいねえ」

雛子ちゃん、事故率を格段に上げるような行為はやめてくれ。」

「で、その夜の部っていうのはね、テレビとかでたまにやってるじゃない。幽霊がよく出るって場所にカメラを配置して、その様子をモニターするっていう。今回はあれと同じことを行ってみよう」

「って、それ本当。カメラって……当然赤外線だよな。しかも離れたところからモニターするって。そんな機材どこから調達してるって言うんだ？一高校生の部活レベルじゃ考えられないぞ」

「へへへ、それがね、撮影用の機材とかその他諸々はいつも伊集院先輩が用意してくれるんです」

「えっ、伊集院って……あの伊集院光志君」

「はい、その伊集院先輩です」

成程、そう言うことなら高価な機材が用意できるのも分かる。

伊集院光志^{いじゅういんこうし}。ホテルやレジャー施設などの経営を行っている、伊集院グループの御曹司。所謂おぼっちゃんというやつだ。同学年だが、クラスが一緒になったことは無く、会話したことすら無い。しかし、何かと目立つ彼のことは学校でよく見かける。

それは勿論、いつも女子に囲まれているからだ。

金髪で青い瞳、というわけにはいかないが、どっちかというところイルドな顔つきに、180センチメートル位あるスラッと伸びた長身……十分に美形男子だった。

金持ちⅡ美形＋女子にもてる。

アニメやマンガの世界を見る限りでは、ほぼ成立している方程式

である。今回も特に問題なく成立しているように思える。ただ、現実では必ずしもそうなるとは限らない。以前の経験から、それは僕自身が一番よく知っている。

金があるからと言って幸せになれるとは限らないし、金があることが幸福だとも思わない。だから僕は、彼を妬んだりしないし、彼になりたいとも思わない。

かと言って、生まれ変われるとしたらもう一度僕に生まれ変わりたいとも思わない。大切な人の側にいられるなら、僕が僕である必然性は無い。

僕はそう思っている。

しかしながら、伊集院君は一体どうしてこんな怪しい部活に入部したのだろうか？

別に、金持ちは心靈研究会に入部してはいけないと言う決まりは、学校的にも社会的にも無いだろうけど……。

いや、むしろ逆か。心靈研究会に、金持ちが入部することに違和感を抱いているのだろうか。

うちのような、二流の私立高校になぜ入学したのかという疑問を含め、かなり謎が多い金持ちのようだ。

しかし、そのおかげで、心靈研究会の連中もこんなに本格的な検証？が行えるのだから、正に伊集院様様と言ったところだろう。

彼が本気で興味があって入部したのかも、全く興味が無いけど入部したのかも、それとも何かほかに目的があって入部したのかも・

・交流が皆無の僕には推し量ることはできない。

ま、結局のところ、それはどうでもいいことではあるが。

「ふうん、あの伊集院君が部員だったとは……」

「私も初めて知った時はビックリしたよ。でもこれだったら、モニターを見ているだけだから悠でも怖くないでしょ……ふあゝあ」

「あ、うん」

そう言う問題じゃない……と、突っ込みを入れようとしたが、突っ込んだところで結局どうなるものでもないので、大人しく相槌

を打つ。

それにしても、知萌は少し眠たいのだろうか？

彼女が軽く欠伸を飲み込んだのが、僕にははっきりと分かった。

「まあ、楽しみにしててください睦月先輩。以前にも今回と同じことをして、色々と面白い映像が撮れますから・・・なんなら後で見ますか？」

「いや、遠慮させてもらうよ」

百聞より一見が怖し・・・迷わずお断りした。

「ぶうー、残念です」

しょんぼりと頭を垂れる雛子ちゃん。喜怒哀楽が明快で非常に分かりやすい。

それにしても、姫心家を出てもう既に一時間少々。相変わらず、車窓には見知らぬ町の風景ばかりが流れていた。

先程までは、前を快調に走っていた青色のワンボックスカー・・・男子組の乗っていたその車の姿は、いつの間にかこちらから確認が出来ないようにになっていた。こちらが抜いてしまったのか、それとも遅れてしまったのかは分らない。ただし、保永の様子を見る限りでは、目的地までの道が頭に入っているようなので問題は無いみたいだ。

そんなことより問題なのは、目的地まであとどれくらい掛かるかということである。魔咎岳村は随分と山奥にあるみたいなので、代わり映えのない風景ばかりを見ていると、いつまで経っても到着しないのではと不安になってくる。いや、到着しないならそれでもいいような気がするが、その間ずっと、保永が運転する車に乗っていないければならないことを考えると、リスクが大きすぎる。

長時間車を運転していると、次第に集中力が切れてきて、非常に危険だと言う話を聞いたことがある。初心者なら尚更である。本来ならこの辺りで軽く休憩をはさむべきかもしれない。しかし、僕がそれを言ったところで、聞くような保永ではないだろう。

「後どれくらいで目的地に着くんだい？」

「うーん、後二時間くらいかな。ま、あたしのドライビングテクニクだったら30分は短縮できるけどね」

そのドライビングテクニクが当面の懸念事項なのだと口に出来ず、地獄への十三階段をこれから着実に上っていく・・・そんな剣呑な気持ちで胸が一杯になった。本当の十三階段と違って、上りがあれば、下りもあるという現実、今ここでは考えないこととする。

・・・あと一時間で山道に差し掛かり、そこから一時間、ってところか。

「無事に目的地まで辿り着けば御の字かな」

小声で呟く。

「はにゃ？睦月先輩、今何か言いましたか？」

「いや何でもないよ、それより魔咎岳村まで後二時間、もっと雛子ちゃんの話が聞きたいな」

「はいっ。雛子、睦月先輩の為なら何時間でも喋り徹しますよ」

非常に嬉しそうにはしゃぐ雛子ちゃん。

・・・ふと視線を感じて右を向く。

知萌がかなり眠たそうに、半分以上閉じかけた目で僕の方を見ていた。やはり先程から眠たいのを我慢していたらしい。彼女がこんなにもあからさまな表情をするのは珍しい。

きっと、休日の早起きという慣れない生活リズムと、もしかしたら知萌にとっては、雛子ちゃんの話もつまらなかったのかもしれない。

どちらにせよ、僕と二人きりで居る時には決して見せない表情だった。

目で「少し眠ったら」と合図すると、彼女は口元を緩めて、僕に一度微笑んでからゆっくりと瞳を閉じた。

しばらくすると、雛子ちゃんの賑やかな話声に交じって、隣から「すうすう」と可愛い寝息が聞こえてきた。

誰だって、どんなに強い人間だって、眠っている時は同じ。

彼女だって例外ではない。

あまりに無防備な知萌がそこに居た。

保永は、相変わらず危なっかしい運転を続けている。

今事故に遭ったら・・・知萌を守るのは僕だけだな。

そんな縁起でもないことを考えつつも、僕はそれを少し誇らしく思う。

彼女が無防備な時ぐらい・・・ナイト気取りでもいいよな。

僕の予想、保永の証言に反して、その後2時間ほど車を走らせたところで、ようやく山道に差し掛かった。

3章 一 舞台上上がる生贄、九人 一 その2

山道を上りはじめて、もう既に1時間が経過する。姫心家を出発して4時間少々、ここまで来るとちょっとした遠方遠征気分である。舗装されていない道は、もう道とは呼べないくらいに細く険しく、植物が生い茂っていた。周りを見渡す限り木、木、木。これは代わり映えのない町の風景よりも、更に代わり映えがなく、面白みのない風景だった。車は、走るたびに上下左右に大きく振られ、いつ事故に遭ってもおかしくない状況だった。しかし、これはもう運に・・・十回近く事故を起こしそうになったものの、とりあえず何事も無くここまで来られた保永の強運に、全てを委ねる他無かった。

しかしながら、この山の草木は健康そのものである。冬の植物といるのだろうか。寒さに屈することなく、皆青々とした葉を茂らせている。見ている限りでは、葉が枯れ落ちた木はほとんどない。一歩間違えると自分は今、真夏のジャングルに居るのだと錯覚してしまいそうである。

「というわけで、その時雛子はすっごく感動して泣いちゃったわけですよ」

雛子ちゃんは、休む間もなく話を続けていた。よくもまあ、ネタも声も続くと感心するが、恐らく彼女にとってこの程度のことは朝飯前なのだろう。ペースが衰えるどころか、ここにきて更に加速している感じさえある。

「すうすう・・・」

そして知萌は、相変わらず僕の隣で可愛い寝息を立て続けていた。この揺れの中で、ひたすら眠っていられるなんて・・・我がご主人様ながら、なかなか大したものである。

ガゴンッ

「はにゃっ!」

突然車が急ブレーキを掛けて停車する。僕は眠っている知萌の頭が、運転座席後方にぶつかからないようにさっと右手を伸ばし、彼女の体を支える。

・・・知萌は、狸寝入りしているのかと思うほど、全然起きなかった。

「と、突然どうしたんですか保永先輩・・・急ブレーキは危険です」「いやあ、ごめんごめん。ちょっと分かれ道があって・・・えーっと、どっちだったっけな」

フロントガラスから前方を確認すると、保永の言った通り左右に分かれ道が存在していた。どちらの道も細く、草木が所狭しと生い茂っており、これまで通ってきた道と何ら変わりは無かった。昼間とは思えない暗さ。そして、その暗闇の先に続く、道の様な道。むしろ、ここで道を間違えたら二度と帰って来られない。そんな、暗闇の先から、誰かが手招きしているような不気味さに、僕は不快感を覚える。

こんなに細い道では、車をUターンさせることすら不可能なので、あながち気のせいというわけでもなさそうだが。

「おお、そうだ、左だった・・・いやー、もう少して忘れするところだったよ」

そう言えば、保永が道を迷うってこと自体がここまで無かったな。都道府県もいくつかまたいでいるので、地図を片手にでもよさそうのものが・・・僕は、率直な疑問を投げかける。

「保永さんは、一度下見とかで魔咎岳村まで行ったことがあるの？」

「いいや無いよ。村までの道順ならあらかじめ頭の中に叩き込んできた。あたしってほら、記憶力がいいじゃん」

いや、そんなことは聞かれても知らないけど・・・でも、もしこれで無事に到着したら、確かに凄いのかも知れない・・・色んな意味で。

もし到着しなかったら・・・それは即ち「遭難」だ。

「因みに、もうすぐ村の入り口に到着するから・・・あと30分く

らいかな」

保永がそう言いながら、再び車を急発進させる。信号待ちで停まった時もそうだが、発進はもう少し緩やかに行ってほしいものだ。つくづく、同乗者に優しくないドライバーである。

「そっか・・・最後まで気を抜かないで運転してくれよ」

「あたしのドライビングテクニクは半端じゃなかったっしょ」

「確かに、半端じゃなかったかもね」

今ここで、保永未来さんに「デンジャラス」の称号を与えたいと思う。

そしてこれからは「デンジャラス未来」と名乗るがよい。

その後、またまた保永の証言に反して、約5分で村への入り口と思われる少し開けた場所に到着した。周りは、相変わらず青々とした木に囲まれているのだが、そこだけがぽっかり、いかにも駐車場と言わんばかりに広いスペースが保たれていた。しかし、当然のことながらそこは駐車場と呼べるほど整備されておらず、僕の腰くらいはあるだろう、長く伸びた草がまるで稲の様に生い茂っている。

こういう経緯でこのようなスペースが出来上がったのかは不明だが、車を停めるスペースとしては十分である。それに、これだったらいくら「デンジャラス未来」でも、車をUターンさせることが出来る。

往路があれば、当然復路もある。一つの不安要素が解消されたことを心から嬉しく思った。しかし、それでもまだ不安要素が大量に残っていることは言うまでもないが。

「デンジャラス未来」の名は伊達じゃない。

女子組の車が到着した時には既に、男子組が乗っていた青のワンボックスカーが駐車場もどきに停められており、後部に積まれていたと思われる機材が、男子達の手によって外に運び出されている途中だった。

保永は、青のワンボックスカーの隣に車を停めた。その際、機材を運んでいた男子に接触しそうになったが、そんなことはお構いな

しだった。・・・流石。

「到着、みんなお疲れさん」

4時間以上に及ぶ乗車が終わり、僕はとりあえずホッと息をつく。隣では、ようやく目を覚ました知萌が大欠伸に伸びをしていた。本当に狸寝入りをしていたと思わせるほど、絶妙なタイミングだった。

「どう、よく眠れた？」

「うん、もう大丈夫だよ。それよりごめんね、みんなが楽しく話をしてる時に一人寝ちゃって」

寝起きの目をパタパタさせながら言う。

「うんにゃ、別に構わないっしょ。人間誰だって睡魔には勝てないからね。あたしも、よく授業中に睡魔に襲われてね・・・まったく、手強い奴だよ睡魔って」

保永が淡々と話す。

「保永先輩は睡魔さんに弱すぎです。雛子のクラス担任の今泉先生が言っていましたよ「保永は俺の歴史の授業中はずっと寝てやがる。俺に恨みでもあるのか」って。これからは睡魔さんが襲ってきたら戦いましょう。武器は・・・強い意志です！」

「それは駄目だ、完全に欠落してるし。因みにあたしは、誰の授業だって大体寝るけどね。でも、確かに歴史は特にかつたるいんだよな。それに雛子、二年の居眠りクイーンの名をほしいままにしているあんたが随分言うじゃない」

「えへへへ、そうでした。あ、でも雛子は居眠りクイーンじゃなくて居眠りプリンセスです。それに、雛子はちゃんと睡魔さんと戦っていますよ。でも、まだ雛子の強い意志はレベルが低いですから、被弾しちゃうと一発でやられちゃうんです。睡魔さんの奴ってば、とってもズルイ奴なのです。あんなにも強いくせに、しもべの羊や戯言を送り込んでくるんでしゅよ」

「ってか雛子ちゃん、先生の話が戯言っていうのは、いくらなんでもだよ・・・それに、羊まで数えて自ら寝る気満々じゃない」

「はにゃっ！一つ忘れていました。雛子の強い意志には、睡魔さん

に絶対勝てないっていう特殊能力が付加されていたんでしゅ」

「・・・随分と弱い意志だね」

「はにやにやつ！睦月先輩相変わらず厳しいでしゅ」

「ていうかさ、雛子の強い意志は、あたしの弱い意志よりも絶対弱いな」

「はにやにやつ！なんだか今日は、保永先輩まで雛子に厳しいでしゅ。妹木先輩、雛子をフォローしてくださいです」

「えっ、ええっ、ふお、フォロー・・・ふおろ」

突然話を振られた妹木は、狼狽気味になって言葉を詰まらせる。

「えーとね・・・フォロースルーが大きくて、す、素晴らしい投球フォームです・・・って解説の人が言っていたよ」

「はうっ、妹木先輩何の話をしてるんでしゅか」

意味不明なことを喋り出した妹木。どうやら、別のことを考えていて、上の空だったみたいだ。妹木は、大体常にボーっとしているので珍しい現象ではないが、彼女の頭の中が覗けるのなら興味本位では非覗いてみたいものだ。

蝶々とかが飛んでて、花に顔とかが付いたりするのかな。

・・・我ながら、随分メルヘンチックな想像だった。皆に話すと、女の子見たいってまた笑われるんだろうな。

「あはは、私が寝てる間もずっと皆でこんな話をしてたの？」

知萌が嬉しそうに尋ねてくる。

「うーん、大体は雛子ちゃんが話通しだったけど・・・でも、話が逸れるとこんな感じだったかな」

「そっか・・・よかった。私、悠と心霊研究会の皆との馬が合うかどうか心配だったんだ」

「まあ、うちのメンバーは結構いい奴ばかりだからね。ま、男連中もいい奴ばかりだから、すぐに仲良くなれると思うよ」

「・・・そうだといいいんだけど」

そう言うと、知萌はもう一度軽く微笑んだ。

彼女は、僕と他の女の子が仲良くすることをどう思っているのだ

ろう……。やっぱりそれが気になるところだった。

今の知萌の表情が、言葉が、仕草が全てじゃないってことを僕は知っている。だからと言って、今の知萌じゃない知萌が全てじゃないってことも知っている。

でも、知萌の本心は、10年以上付き合いがある僕にだって読み取るのは困難である。

・・・やっぱり僕は、人の心が覗ける能力が欲しい。

勝手に人の心の中を覗いてるんじゃないかねって、滅茶苦茶怒られそうだけど。

君を一番喜ばせることが出来るのは僕だろ。

君を一番楽しませることが出来るのは僕だろ。

そんなことを心の中で考えている内に、ふと知萌と目が合い、僕はそれが恥ずかしくて堪らなくなった。咄嗟に視線を逸らす。

知萌は、今の僕をどう思っただろう。

僕が心の中で、ことあるごとに告白しているとは、夢にも思っていないだろうな。

「おい、女子共！、いつまで車の中に籠ってるつもりだ。とっと出て来たってんだ」

車を停めたものの、いつまでもエンジンを切らずに、中で駄弁ってばかりいる僕達に対して、一人の男子が声を掛けてきた。中々体格がよく、背も高い。どっちかと言うとスポーツ系の部活に所属するべきではないか、という印象だった。彼の名前は、どう足掻いても出てきそうにないが、これは入学当初、初めて学校で彼を見かけた時の印象とほぼ同じである。

へえ、僕はてっきりラグビー部とかそういう部活に所属しているとかばかり思っていた。伊集院君もそうだけど、人は見かけによらないってというのは、つくづく真実をついていると思う。

「えー、もうちょっと待ってよ。だってほら、外寒そうじゃん。弥代は体鍛えてるんだから大丈夫だろうけど、かよわき乙女たちは寒さに弱い・・・分かる？」

彼の名前は弥代と言うらしい。

確かに車の中は暖房が効いていて暖かい。寒いのが苦手な僕にとっては大助かりだ。・・・でも、僕が男だという事実を完全に無視して話を進めるのは、出来ればやめてほしい。それと、もう一つ言うならどう考えても知萌は、男子を含んだ今回のメンバーの中で最強だ。残りの面子を確認しなくてもそれだけは確実である。・・・我が校に、知萌を超える強者はいない。かよわき乙女などというのは、正に臍で茶が沸いてしまいそうな言い回しである。

これだったら、僕の方がかよわき乙女にピッタリ嵌まる・・・それが残念で仕方が無い。

しつこく言わせてもらおう。僕は男だ・・・よな？

「ああ？何つまんねえこと言ってんだ。時間も押してるんだから早くしろ。ったく、ちんたら運転しやがって・・・30分は待ったぞ」
「もうう、仕方ないじゃないの。だって伸汰は、あたしより2週間も先に免許を取ったんだし」

そういう問題じゃなく、八割方センスの問題だと思うけど。出来れば僕も、帰りはその伸汰ってやつが運転する車で帰りたいものだ。速い＝安全と考えるのは少々危険かもしれないが、「デンジャラス未来」の運転する車に比べたら、幾らかはマシだろう。

しかし、伸汰ってどんな奴だっけ？どこかで聞いたことがある名前だが、名前を聞いても顔が全然浮かんでこない。・・・つくづく同級生の名前と顔に疎い僕だった。

「んなことはどうでもいいんだよ。どうしても出てこないって言うなら、扉をぶっ壊して外に引きずり出してやろうか」

そう言っていると、弥代って奴は運転席の扉をドンドンとたたき出した。どうやら、口調も行動も少々荒っぽい性格のようだ。保永は、部活のメンバーはいい奴ばかりと言っていたが、こういう奴が世間一般

で、果たしていい人間と呼べるのだろうか。・・・根はいい奴なのかもしれないが、どうも僕はあまり好きになれないタイプの人間のようなのだ。

ん？・・・僕の好きな女の子に似てるって？

冗談、彼女と彼と一緒にしないでくれ。

「ちよっとちよっと、弥代、あんたあたしの愛車に何てことしてくれているの。分かった、分かったからもう叩くのは止めてって」

保永が急いで車のエンジンを止めると共に、弥代って奴も叩くのを止める。

「ったく、しょうがないなー」
ガタン

保永が運転席から操作して、四つ全てのドアロックを外す。それに続いて、保永、雛子ちゃん、妹木、知萌、僕の順に外に出た。途端、空気の色がガラッと変わった。

薄暗い雰囲気に、辺り一面の草葉色。山奥だと言うのに、空気は不味く、どこか淀んでいるような気がした。静かだった。風は無く、草木はまるで時間が止まっているかの様に直立していた。この大自然に囲まれた空間、自然の音が全く耳に届かないのはかなり不自然である。それに寒い。昼間だというのに、体感気温は今朝と同等、もしくはそれ以上に感じた。蓄えられていた体の熱は、あつという間に奪われていった。体が小刻みに震える。やはり寒いのは嫌いだ。すぐさま厚手のコートを羽織ってみたが、この震えは暫く収まりそうになかった。

常に下半身に纏わりついてくる草が非常に不愉快だった。僕は、足でそれを横に倒し、自分の立ち位置をキープする。キープしたところで、移動すれば結局はまた同じ不愉快を味わうことになるのだが、地面が確認できないと言うのは、あまりいい気がしなかった。何の変哲もない土色を見て、少しほっとする。隣では、知萌が長い草の先っぽを千切って遊んでいた。そして、それを指で摘まんで不思議そうにこちらを見る。

僕はハツとする。

不愉快に思っただけ均してしまった雑草。僕は、悪いことをしてしまったのかもしれない。素直に驚きの表情を見せる知萌を見ていたら、急にそんな後悔を覚える。

こんなにも長く育った雑草は今まで見たことが無い。驚きよりも不快感が先行するのは、余裕が無い証拠だ。

寒さのせいだろうか。それともこの不気味さのせいだろうか。知萌が側にいてくれるのに、こんな気持ちになるのはもしかしたら初めてかもしれない。

「悠、私こんなにも大きく育った草は初めて見たよ」

知萌は嬉しそうに笑った。

「僕も、初めてだよ」

僅かばかりの笑顔を返すのが精いっぱいだった。

不安を感じた。直観的な不安。体の中を、何かドロドロしたものが巡っていくような感覚に、体の震えはピタッと止まる。しかし、震えは止まったが寒気がする。

なんなんだこれは？

これまでも、知萌と一緒に幾度となく危険な場所に赴いたが、こんな感覚は初めてだった。

これから向かう場所は、ただの廃村のはずだ。確かに、恐ろしいわく付きではあるが、そんなものはハナから信じていない。本気で心から信じていない。それでも、幽霊が出現する可能性を完全には否定できないが、確率としてはほとんどゼロだと考えている。雰囲気は怖いのだって、知萌や妹木と一緒にんだからそれほど問題ではない。

・・・だったら、この不安感は何なのだ？

予感？

確か、昨日丹雫先生が「こう言うイベントには、意外とおいしい

展開が待っている」なんてことを言っていた。でも、もしこれが本当に予感と呼ばれるものだとしたら、美味しい展開など待っているはずが無い。今までに無い感覚だったが、これだけははっきりと分かる。

これは悪い予感だ。

無風だった山林に冷たい風が吹き抜ける。体の震えは再開された。僕は、既に冷たくなった手と手を擦り合わせながら思う。

・・・寒いな。

木の葉達がじゃれ合う音が、辺り一面に鳴り渡る。

・・・まるで、僕の気持ちを悟ったかのような、不愉快で耳障りな音だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8535h/>

幼馴染の女ノコ-同級生と殺意の村-

2010年10月10日01時19分発行